

研究報告書 Research Report

芸術学部 館長
芸術学部 教授
吉井 章 Akira Yoshii

芸術学部 教授
大井 健次 Kenji Ooi

国際学部 教授
大井 健二 Kenji Ooi

芸術学部 教授
北田 克己 Katsumi Kitada

芸術学部 教授
蝦澤 達夫 Tatsuo Ebisawa

芸術学部 教授
伊東 敏光 Toshimitsu Ito

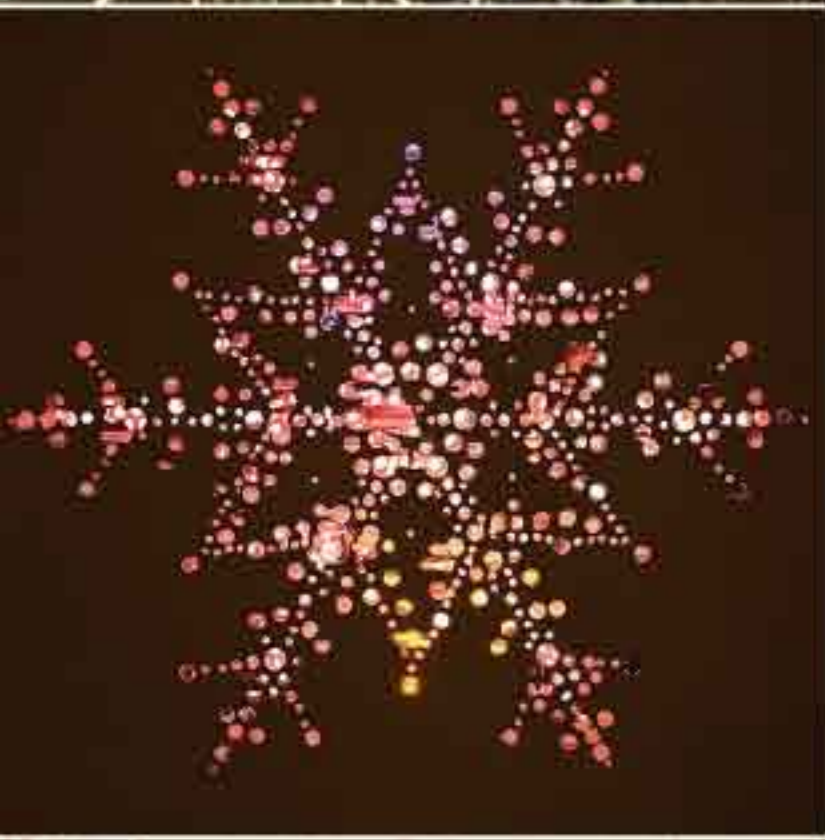
芸術学部 准教授
加治屋 健司 Kenji Kajiya

芸術学部 非常勤助教
中村 圭 Kei Nakamura

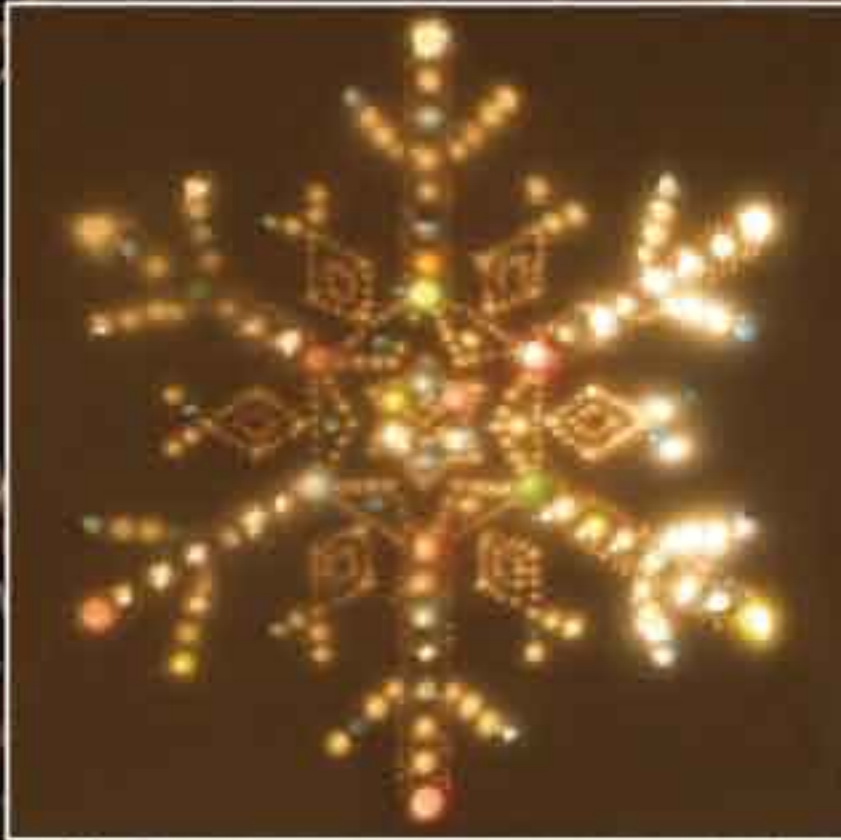
広島市非常勤職員
芸術学部 非常勤委員
菊田 恵 Megumi Kikuta

芸術学部 非常勤講師
前広島市現代美術館 副館長
竹澤 雄三 Yuso Takezawa

広島県立美術館
学芸課長
松田 弘 Hiroshi Matsuda



【ウィンターフェスト2009】



【ウィンターフェスト2008】

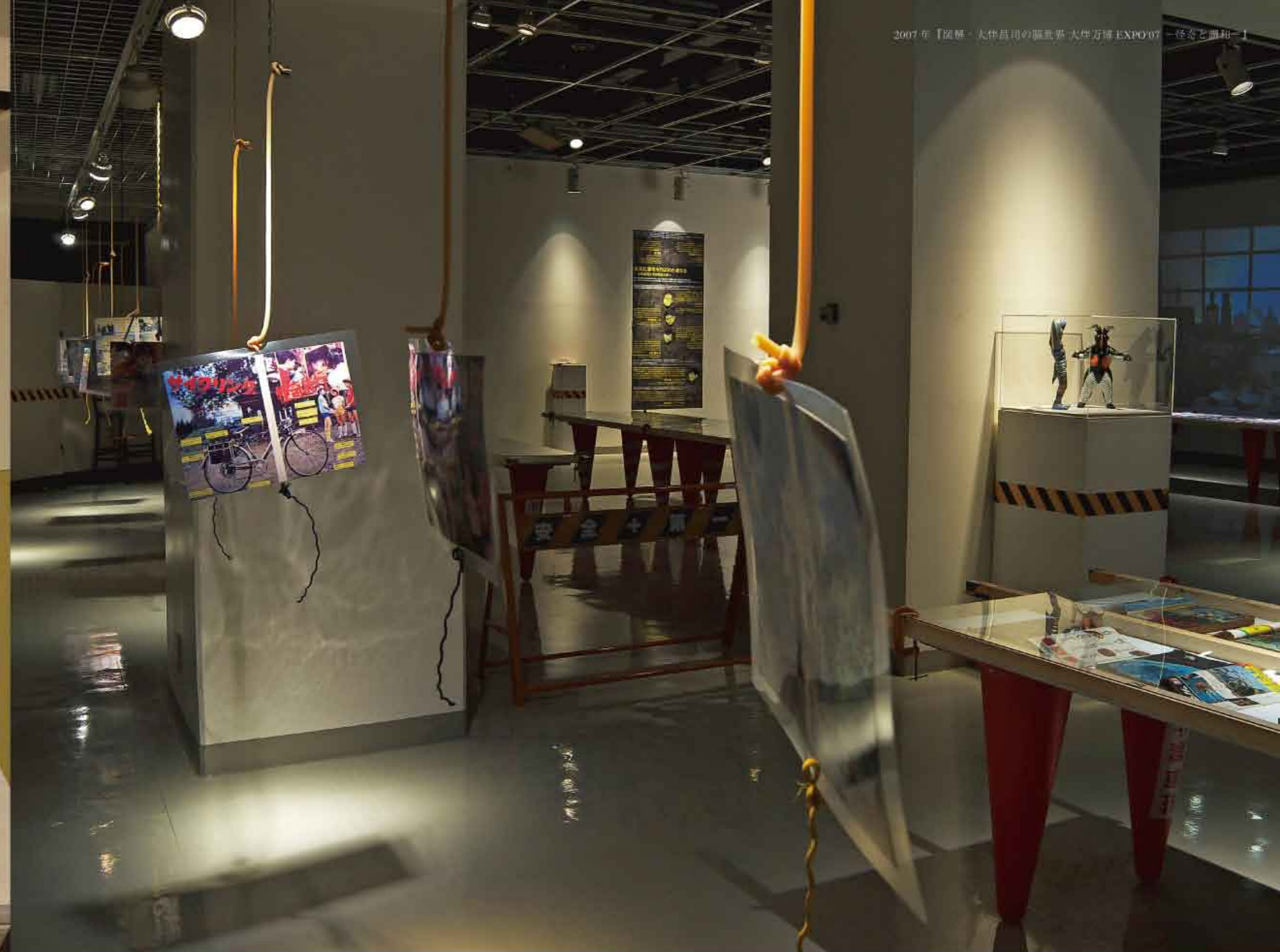


2009年「光の庭」プロジェクト

2009年「光の庭」プロジェクト「光の庭」プロジェクト 設計・監修 和気 敬雄

会 覧 展
さ
ぶ
く

展 覧 会
を
つ
く
る



「展覧会をつくる」アートディレクション 鯉澤 達夫

2004年から2009年までの6回に渡り、芸術資料館で行われた企画展を振り返ってみたい。

2004年から2006年までは、一般の市民の皆さんとの共同作業、2007年から2009年までは、芸術学部の学生をメインに行われた。まず最初に思うこととしては、過去にデザイン事務所で仕事をしてきた者として、どの辺を落としどころにするべきか？をいつも考えていた様に思う。大手企業の仕事のクオリティーは、常にハイレベルであるだけでなく、インビテーションで行われるコンペは、毎日夜を徹しての仕事になる。エグゼクティブディレクターとしての責任は、社運がかかると言っても過言ではなく、私自身の感覚と感性をクライアントに見透かされているかの様であった。仕事の大小、予算の多い少ないで、こんなものですよ、と言う訳にはいかない。その姿勢は、当然「展覧会をつくる」においても同様であった。

2004年の『SAMURAI'S DANDYISM 手の中の日本の美-武士のオシャレ金工展』は、刀の鏝など機能の極まった装飾美を展示するための空間をつくらなければならなかった。全くの専門外で未経験のジャンルであるばかりか、どの様に見せれば、常に生死の境で生きていた侍達を飾った工芸品が美しく、儚く、緊張感を醸し出せるかを考えた。熟慮の末に出来上がった空間は、よりミニマルで、名も亡き武士達の墓の様相を呈し、会場の空気を変えることに成功したのではないだろうか。展示台の制作から、寒冷紗を貼り込み、仕上げの塗装まで、市民の皆さんもよくついて来てくれたものだと思ってしまう。

企画は、2005年の『BLACK×WHITE 白と黒の展覧会 子供の眼差し 作家の眼差し』、2006年の『銅版画 夢・人・愛 瑛九展』、そして、2007年の『図解・大伴昌司の脳世界 大伴万博 EXPO'07 怪奇と調和』へと繋がる。この展覧会が、市民の皆さんと学生達による初めてのコラボレーションで行なわれた企画展である。この企画の焦点は、まさに我々の世代が子供の頃にわくわくしながらテレビの前に座っていたあの時代を象徴する、「ウルトラ Q」のバルタン星人の産みの親、大伴昌司、その人である。高度経済成長の名の下、東京オリンピックの開催、新幹線の開通など、国の経済力を世界にみせつけるべく好景気にわいたあの時代は、どこもかしこも工事中の様相を呈していた様に思う。展覧会の予算の問題もあったが、そのような時代性を背景に、企画展のコンセプトは「工事中」とした。大学構内にある赤いカラーコーンが展示台の足になり、虎カラーのバリケードや虎テープは重要な演出道具になった。むき出しのベニヤ板と垂木のテーブルは、透明のアクリル板で大伴昌司の作品を包み、百円均一の商品を扱う店舗を梯子して集めた C クランプが作品を扶んだ。少ない予算を逆手に取った、すぐれた展示との評価をいただいた。

最後に、2008年の『ウィンター・フェスト ひかりあかりのりふわり メッセージ2008』と2009年の『ウィンター・フェスト 暖・談・団 極寒に生きる-アイヌ、イヌイットの文化と生活』展は、前者が資料館の収蔵作品の照明器具を、後者が民博の資料をお借りしての企画展となった。両方に共通した制作物は、発光する『スノーフレーク』である。1 回目は、資料館の窓枠に設置されたベニヤ板に、電動ドリルで穴をあけて造られた雪の結晶が、内部空間に 12 種類、屋外からも 12 種類の結晶の形を見ることが出来た。2 回目には、本部棟の会議室の内部と外部を飾った。また、中庭には無数のキャンドルが展開され、資料館の内部モニターでは制作中の映像が映し出された。無数のキャンドルは、これまで 6 回に渡って行われた企画展のファイナルにふさわしい美しいアイヌの文様を描き、我々を神聖な感覚へと誘った。多くの皆さんの協力なくして、これらの『展覧会をつくる』は成立しなかったと思う。

市民の皆さん、学生、外部学芸員の先生方、そしてスタッフの先生方に対する感謝と同時に、今後の大学美術館構想や国際交流におけるレジデンス構想など、いちアートディレクターとしてこの実績と経験を未来に繋げていければと考える。

はじめに

平成 20 年度に、芸術資料館の研究機能の一環としても先進的な試みである、市民に開かれたプロジェクト、「展覧会をつくる」—芸術資料館運営による施設のあり方研究と市民との協働実験—が、地域連携プログラム「ウインター・フェストプログラム」として開催された。

NPO 研究から始まった市民講座「展覧会をつくる」は平成 16 年度より、その後毎年 4 回にわたり実施された。公募した市民受講者を対象とした講座を開設し、芸術資料館での展覧会を重ねた。このような市民参加型のプロジェクトに、平成 19 年度から学生が授業の一環として参加。現在の運営では学生と市民参加の地域連携という芸術資料館を「器」の場として、人と人が輪を創りながら理想的な活動を展開することができたのではないかと思う。

さて、「広島」では夏の原爆記念日を中心におごそかな鎮魂の式が開かれる。「広島」の季節をイメージするならば、冬の行事として、新たにこの大学のキャンパスを中心に人が集い、人の輪で芸術的な活動ができればという思いが「ウインター・フェストプログラム」を展開させたのである。芸術資料館の西側の窓に創られた、象徴的な「雪の結晶」を意識した造形がこのプロジェクトのキーワードであるように思う。

本学が独立行政法人化を来年にひかえ、芸術資料館としてもさまざまな課題をこなさなければならない時である。広島市立大学創立時のアドミッションポリシー、「科学と芸術を軸に世界平和と地域に貢献する国際的な大学」を建学の基本理念とし、『次代を担う感性と創造力の豊かな人材を養成するとともに、優れた教育研究の成果を地域に還元し、もって文化の向上と社会に発展に寄与する。』ことを掲げた「精神」を見つめて新たな創成に望むものでありたい。

このプロジェクトに参画された皆様の大いなる成果をこの報告書でご理解をいただけたらと存じます。

広島市立大学芸術資料館長 吉井 章

本報告書について 吉井 章

平成 20 (2008) 年度特定研究「展覧会をつくる」では、研究の一環として芸術資料館のあり方を検討する研究会を実施した。

本学附属施設である芸術資料館は、小規模ながらも着実に作品収集を推進し、さまざまな教員の研究活動、教育に利用され、地域にも存在感を示しつつある。研究教育支援や地域連携における芸術資料館の潜在的な可能性は大きいですが、そのためには改善すべき点、拡充が必要とされる点も多い。

特に平成 22 年度には本学が独立行政法人化を迎えるに当たり、今後を展望してより一層の活性化のために実りある議論を推進し、明確な方針を提示すべき時期となっているのではないだろうか。

市民講座「展覧会をつくる」では芸術資料館の活用を図り、実際に展覧会を企画するなどの市民の参加実験をおこなってきた。研究会ではその実績と成果を踏まえ、芸術資料館のあり方に対して各発表を行ない、また大学と地域にとっての芸術資料館について広範な参加者による意見交換を行った。

本書には研究会発表の一部を所収するとともに、本研究を総括する論文を掲載する。今後の芸術資料館の発展にいささかでも資することを望むものであり、また各方面からのご意見を賜りたい。

平成 20 年度特定研究「展覧会をつくる」
最終研究会実施要領
日程：2009 年 3 月 26 日 (木)
会場：広島市立大学講堂 小ホール

1. セッション I
「特定研究『展覧会をつくる』と関連研究について」
広島市立大学芸術学部教授 北田 克己
「WFP について」
広島市立大学芸術学部非常勤助教 和気 琢哉
「市民講座について」
広島市立大学芸術資料館嘱託学芸員 菊田 恵

2. セッション II
「WFP に参画して」
広島市立大学芸術学部美術学科日本画専攻 2 年 尾崎 加奈
「大学美術館が大学にもたらしたもの」
東京藝術大学大学美術館教授 薩摩 雅登
「美術館と地域」
広島県立美術館学芸課長 松田 弘
「施設構想について」
広島市立大学芸術学部教授 北田 克己

3. セッション III
座談会
「本学の課題と地域における大学施設のあり方について」
および質疑応答
登壇者
広島市立大学 芸術資料館長 吉井 章
広島市立大学芸術学部 教授 中嶋 健明
広島市立大学芸術学部 教授 前川 義春
広島市立大学芸術学部 教授 北田 克己
広島市立大学芸術学部 教授 伊東 敏光
広島市立大学芸術学部 准教授 蝦澤 達夫
広島市立大学芸術学部 准教授 加治屋 健司
広島市立大学国際学部 教授 大井 健二
東京藝術大学大学美術館 教授 薩摩 雅登
広島県立美術館 学芸課長 松田 弘

* 職名、学年は平成 21 年 3 月現在のもの

芸術資料館活動報告

市民講座について -地域社会と芸術とソーシャル・キャピタル- 菊田 恵

2009年3月26日(木)に広島市立大学講堂小ホールで実施された、平成20年度特定研究「展覧会をつくる」最終研究会において、報告として発表したものに、加筆・再編集したものを掲載しています。

市民講座「展覧会をつくる」とは 広島市立大学は地域に貢献する国際的な大学として、現在も様々な地域貢献の取り組みがなされている。近年それらの活動も非常に活発となり、また継続性も出てきている。芸術学部では、中区吉島地区での「再生」をキーワードとするパブリックアートのプロジェクト「広島アートプロジェクト」や、竹林の整備を伴った、大学周辺の大塚地区での造形活動「大塚かぐや姫プロジェクト」、被爆地としての広島と絵画の意味を問直す「光の肖像」展-被爆者たち、それを受け継ぐ者たちの眼差し-、児童、園児にアートをのびのびと体験させる『キッズキャンパス』などが継続的に実施されている。

そのなかにおいて、この市民講座『展覧会をつくる』では、5年間に渡り市民を対象とした、美術館での実習や展覧会の実施を中心とする、美術館教育の可能性を探るためのプログラムを実施し、市民に対して美術・文化系の生涯学習の機会を提供してきた。参加人数としては、これまでの5年間で、通算87名の受講があった。

この講座の受講者は、美術鑑賞が趣味の方、美術愛好家や習い事などで創作活動をしている方、過去に美術系大学などで創作活動をしていた方、過去に創作的な仕事をされていた方、現在も創作を伴う仕事をされている方、また、学芸員志望の大学生や高校生などが主な受講者となっていた。

特に参加の目的としては、展覧会の開催の実務や美術館実習、美術鑑賞などに関して「再び学びたい」「深く学びたい」「日頃出会わない新しい人たちと出会いたい」というもので、そのような需要の受け皿となるような内容だった。



期間中の毎週連続して開催する座学の約8回では、市内美術館の学芸員や、市立大の教員、各分野の専門家が講師を務め、専門家の興味深い話を聞くことができた。また、市内美術館の協力を得て美術館実習も組み込み、日頃見る事の出来ない、施設の奥のバックヤードや収蔵庫を見学し、実務や運営に関する苦労や裏話まで教えていただくなど得がたい体験を提供することができた。

受講生はそれらの講座でレクチャーを受け、その講座以外にも自ら学習、研究した。また、芸術資料館の収蔵品から、

展示作品を選び、展覧会のコンセプトや展示計画を練り、企画を立ててから、展覧会を立ち上げるまでの準備の過程にも参加するという、体験・実践型の講座だった。

最終的には展覧会を実施し、本学の学生、地域の方々に公開した。芸術資料館の収蔵作品の刀装品を多数展示した展覧会や、編集者大判昌司の資料展示など、反響の大きい展覧会もあったが、実施した5回とも、市民の発想やパワーが生かされ、興味深い内容となっている。

広島市立大学施設の活用 準備には、広島市立大学の施設をフルに活用した。芸術資料館の収蔵庫で収蔵品を手に取りながら、大学の工房である、現代表現工房やプラスチック工房で作業し、大学の附属図書館で調べものをする、学内の画材店で材料を購入したり、学食を利用するなど、大学の施設を利用した。各施設の教員や専門スタッフの方々のご指導、ご協力を頂き、準備を整えることができた。

展覧会で展示するという最終目的までに、作品や作家の学習・研究に時間をかけて深める時間が、どうしても長くなった。受講者からすると、時間と労力がかかったという点で、普通の一般的な、市民向けの座学レクチャーだけの、数回で終わる公開講座よりも、非常にハードな内容であったとのことだった。

しかし、受講生の方は、企画への内容を深めながら、展覧会を一から作り上げていく醍醐味から、毎年参加くださる受講生もあった。開催を重ねるにつれ2度3度と参加するリピーターも数えることとなったことは、実施した側としても嬉しいことだった。

また、専門家並みの知識を有する人材も毎回、数名の参加をいただき、講座を運営する上でも全体を牽引していただき非常にありがたかった。

そして、毎回、高校生や大学生が数名参加してくれていたが、その生徒、学生が、講座を通して刺激を受け、また現役の美術関係者と一緒に交流、研究することによって、美術館学芸員などの仕事に就くことに向けて、より強い動機付けとなった事例もあり、実施した意義を実感として感じる事ができた。高校生は芸術系の大学へ、大学生は芸術系の大学院へ進学する事例もあった。

市民の感想 市民の講座の感想としては、創作者、美術館学芸員、評論家、学者などの専門家による生のレクチャーがよかったという感想や、創作者、美術家としての教員と協働作業をしたり、レクチャーを受けることによって、高い完成度を求める意気込が伝わり、作家の創作に対する妥協を許さない取り組みを、間近で体感することができてよかったという感想もあった。創作の仕事や趣味を続けている受講生にとっては、これも一つの励みになったのではないだろうか。

この講座の特徴をまとめ

- ・社会教育施設の美術館・博物館教育の取り組み、また地域連携、地域貢献プログラムとしての取り組みの講座であった。
- ・講座の受講生の対象は、芸術・文化・教育に関心がある方。
- ・講座の実施により、地域市民活動の可能性を模索してくるものであった。

- ・受講生自らが展覧会の内容を企画立案し、運営に必要な知識、実務を学び、展覧会を開催運営するまでが内容であった。
- ・芸術学部という「創作の現場環境」を生かして、表現や、技法、材料、歴史、作家、創作意図を深く研究し、展覧会来場者を対象に、関連事業教育プログラム(講演会、ワークショップ)を実施した。

受講生の傾向 受講生は毎年11人から24人の参加があり、受講生は主に男女比では女性が多く、年齢は中高年が中心。職業としては主婦と勤めのある方に多く参加いただいた。

5回の展覧会の概要

平成16(2004)年 市民講座「展覧会をつくる2004」

9.20～9.26 入場767人

SAMURAI'S DANDYISM

～手の中の日本の美～武士のオシャレ金工展

本館に所蔵されている、江戸時代の刀の鐔(つば)、縁頭(ふちがしら)目貫(めぬき)、小柄(こづか)、拵(こうがい)などを中心に87点を展示。それらの小道具は、刀剣を収める拵に施される刀装具で、所持者の身分や権威を明らかにする役割ももっており、精巧な細工で装飾が施されていた。江戸時代の職人が制作した刀装などを展示した。県内の刀装具の愛好家などに非常に好評を得た。



平成17(2005)年 市民講座「展覧会をつくる2005」

10.17～10.23 入場576人

BLACK×WHITE 白と黒の展覧会

子供の眼差し 作家の眼差し

市立大芸術資料館の収蔵品から、白と黒の色に限定して選んだ大皿、彫刻、日本画、古書など作品29点と、モノトーンの画用紙に白と黒の筆記具で描かれた、本川小学校の児童の作品330点、伴南小学校の児童の作品233点を会場の壁面一杯に展示。白と黒の2色だけで構成された展示作品と展示空間は、児童のエネルギーと美術品のエネルギーが一体となり、独特の雰囲気の会場となった。広島市内2校の小学校の協力を得られたことで、実施が実現した。参加した児童やその保護者の反響が大きかった。



平成18(2006)年 市民講座「展覧会をつくる2006」

10.16～10.22 入場353人

銅版画 夢・人・愛 瑛九展

本館所蔵の前衛美術家として活躍した瑛九(1911-60)が40代の時期に制作した銅版画252点の中から、「愛」「自然」「動物」の3テーマに分類した54点を展示。展示方法は壁面を使わず、作品を天井から6角柱状に吊るし、空間を利用した方法を取り、会場全体が独自の空間となった。ハードグラウンドエッチング、ドライポイント、ルーレット、アクアチントなどの版画技法を駆使した、シュールリアリズムの世界を紹介した。ワークショップの版画体験が非常に好評だった。



平成19(2007)年 市民講座「展覧会をつくる2007」

11.4～11.11 入場375人

図解・大伴昌司の脳世界

大伴万博 EXPO'07 一怪奇と調和-

京都大学とNHKエンタープライズに寄託されている大伴昌司の遺品など600点の資料の中から、大伴の自筆図やグラビアの複製、関係図書など38点を借りて展示。大伴昌司は高度成長期、週刊誌「少年マガジン」の怪獣や未来社会の特集グラビアを編集した人物。会場も高度成長期の時代をイメージした空間デザインとし、年表や交友関係をパネルで解説した。初めて受講生市民と、本学学生と一緒に参加し、協力して実施した。学生の参加により、展示空間のクオリティーが向上し年表や人物関係などのパネルも多く製作した。マスメディアからの反響も大きい展覧会だった。会場では、40歳代の男性が、懐かしむ姿が印象的だった。



大伴昌司展

平成 20 (2008) 年 市民講座「展覧会をつくる 2008」、
「ウィンター・フェスト・プログラム WFP」
11.24 ~ 11.29 入場 309 人
ウィンター・フェスト ひかり あかり いのり ふわり
メッセージ 2008

展示室には収蔵作品とヤマギワや作家からお借りした、歴史に残るアーティストの照明器具を展示しながら、市民のアイデアで蚊帳などの演出を取り入れた。窓には内からも外からも鑑賞できる光る雪の結晶《Snowflakes》を学生が制作展示。野外では、幼児や児童対象の教育プログラム『キッズキャンパス』に連動して児童の制作した絵画を野外に展示した。日か落ちてからは、天灯の離陸パフォーマンスやキャンドルライティングを実施。光や炎の表現を実験した。

昔から冬至は世界でも命や熱、光、太陽の「再生」「復活」を思う季節である。平和を希求する広島においても、この季節にふさわしい「光」や「炎」によるアートプロジェクトを地域文化として定着させようというのが、この展覧会のねらいだった。

また、昨年の学生参加を発展させて、2年生が2単位取得できる「造形応用研究」の授業と連動して実施した。学生の実験的な展示とワークショップの取り組みにより、今までにない野外での展示の展開となった。



関連事業について それぞれの展覧会では、美術館活動でいうところの「関連事業」としてさまざまな、教育プログラムを実施し、学外や学内の美術家を招いての参加体験ワークショップや、学外や学内の専門家を招いての講演会、受講生が研究成果から作品を解説するギャラリートークや、鑑賞説明、学内の創作現場を公開する工房棟へのアトリエツアーなどの催しを組み入れ、参加した来場者から大変好評だった。また、受講生もこれまでの研究の成果の発表の場として取り組んだ。

5 回の展覧会企画の展示分類

- ・資料館の収蔵作品を利用した展示 2 回
- ・資料館の収蔵作品と小学生の児童画を併せて展示 1 回
- ・資料館の収蔵作品と外部からの貸出しと学生制作の作品を併せて展示 1 回
- ・全て外部からの貸出しの資料の展示 1 回

講座の成長 2004 年から 2008 年まで、毎年 1 回、計 5 回の市民講座と展覧会を実施したことになるが、4 回目の講座では、本学芸術学部デザイン工芸学科視覚造形の学生に参加してもらうことで、彼らの持っている技術や発想力、造形感覚を生かすことにより、展示クオリティーが非常に上がった。

また、5 回目の講座ではそれを発展させて、芸術学部 2 年生が 2 単位取得可能な「造形応用研究」の授業と連動しての実施となり、芸術学部の美術学科、デザイン工芸学科の学生の参加し、院生も他の専攻との交流を目的とした参加も得た。

市民と学生の協働参加により、お互いに得るところも多く、学科や年齢、職や立場の垣根を越えた交流が触発となり、それぞれに新しい経験を積むことができた好評だった。

「造形応用研究」はその後、2009 年には、学部の 2 年～4 年と、院生にも単位が取れる授業科目となった。このような、プロジェクトに参加する学生にとって、体験だけではなく単位もとることができるというのは、いっそう参加する意欲を喚起する動機付けとして有効であると思う。

また、その 5 回目の講座では、『キッズキャンパス』という、児童・園児対象の大変人気のあるプログラムと連動することができ、児童画を野外に展示したり児童向けのワークショップも展開することができた。地域の児童や園児、初等教育、幼児教育と大学の取り組みの広がりが見られ、今後の期待される。

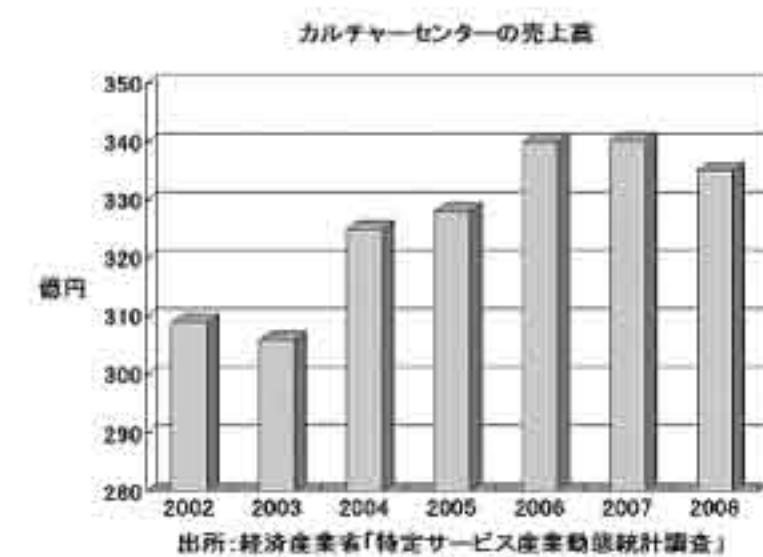
今後は「造形応用研究」授業を中心に運営し、5 回目を実施した冬の催し『ウィンター・フェスト・プログラム』のイメージで地域に根づくプログラムとして発展させていく方向にある。



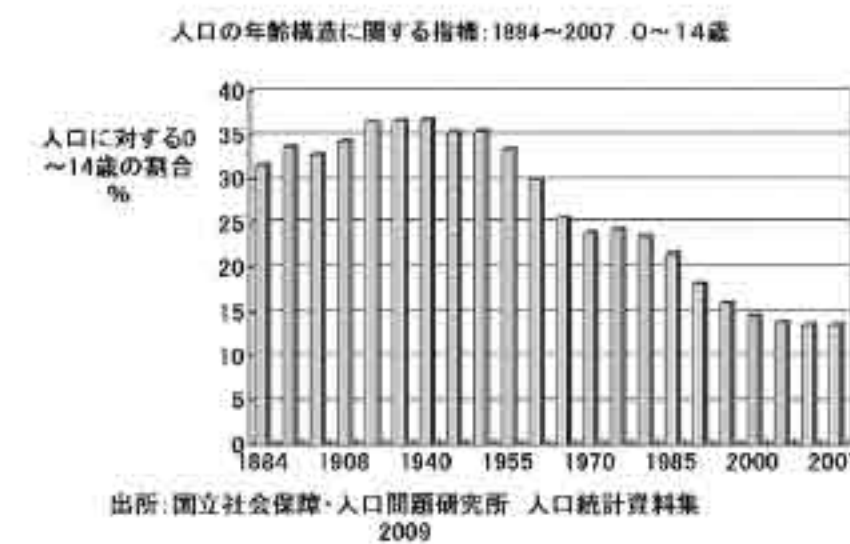
生涯学習のニーズ グラフのように、経済産業省の調査によると、2007 年のカルチャーセンターの売り上げは 340 億 1700 万円と増加傾向にあり、2008 年は不況の影響で 335 億円程度となる見通しだが、傾向としては増加にある。また、最近では特に、「古寺散策」や「地域の植物研究」などフィールドワークと体験を取り込んだ講座に人気が出てきているという。新しく人気がある講座としては、自分が興味を持っている分野で、知的好奇心が刺激され、自らの能動的な体験により、

自分の成長がイメージできるようなものといえよう。

市民講座の受講者の傾向とも合致するが、子育てを終えた 50 歳以上の女性や、60 歳以上の定年退職の男性を中心に生涯学習熱が高まってきているとのこと。そのことから、文化的な活動を提供するカルチャーセンターだけでなく、文化的、社会的な教育機能を有し、生涯学習を提供する、社会教育施設としての美術館や博物館、大学や付属施設にも期待が大きいと思われる。



加速する少子化 国立社会保障・人口問題研究所の統計のように、少子化が加速的に進んでおり、家庭の中での子どもの減少にも拍車がかかり、子どもに対する教育熱も年々高まっている。幼児期からの、多様な教育的体験の機会を求める親御さんたちの増加が考えられる。本学部で実施した、児童、園児を対象とした美術体験のプログラム『キッズキャンパス』も大変盛況であり、子どもを対象とした、あらゆる好奇心や興味を持つことができるプログラムを提供すること、知的、芸術的、科学的、体験的早期教育はこれからもニーズが高まっていくと思われる。



地域貢献への期待 昨今、大学や社会教育施設は立地地域や設立主体の自治体に対する、地域貢献が益々求められており、大学であれば、研究成果の発表や、産学官連携などでの商品やサービスの開発、人材交流、人材の育成などが求められている。

身近なところでは、市民講座や講演会、公開講座などの開催による施設や人材の貢献などで、生涯学習や児童・生徒への課外学習のニーズに応えるという貢献が求められている。

地域社会の衰退 日本でも社会の変化により、地域コミュニティの崩壊が言われて久しい。新聞購読の減少は、地域での社会参加の減少との相関性があるという。自治会への不参加の増加、子ども会の衰退、お寺の檀家の減少、華道茶道な

どの伝統文化を継承する若者への生徒の減少に現れているように、伝統的なコミュニティは衰退傾向にある。日本的な、社員を家族とする、企業組織も例外ではなく、「終身雇用」は昭和の思い出となりつつあり、不安定な雇用の形式が増加している。これらの社会的変化は、ライフスタイルの変化、個人主義の浸透、人口構成の変化や、産業構造の変化、人口移動に伴う過疎化と都市化、郊外化、少子高齢化による変化などの影響が大きい。

地域社会や地域住民、家庭の安定にとっては失ったものは大きいといえる。

《社会関係資本》ソーシャル・キャピタルとは ロバート・D・パットナムは、『孤独なボウリング: 米国コミュニティの崩壊と再生』の中で、人と人の繋がりを、《社会関係資本》と捉え、市民参加が活発な社会では、教育的環境について「子どもの健全な発育」「学校の円滑な運営」「テレビの視聴が短い」、生活の質において「暴力犯罪が少ない」「経済的平等性をたもつ」「脱税が少ない」という研究がなされている。つまり社会的なつながりが感じられる地域では住民の幸福度を増進するという結果である。

また、大阪大学教授、志水宏吉は『学力格差は「きづな」の差』の中で、都道府県別の学力テストの 50 年前と現在の比較から、子供の学力格差を生む主要因が、子供と地域や家族との、信頼関係や社会参加の有無、ネットワークなどの人間関係のつながりが反映していると指摘している。《社会関係資本》とは「人間関係が生み出す力」であり、地域、家庭、学校のなかで、再構築が必要だと説いている。

参加の形 市民参加といっても、消費や鑑賞という受身の参加の形より、ダンスや演劇、合唱、作品の制作といったような、あらゆる表現活動に自らに参加するという、体験を伴った能動的な参加が、個々人の主体的な力となってそれらの影響を生み出すという。芸術活動がそういったことへ貢献する役割は大きいとおもわれる。



コミュニティ再生への模索と芸術活動 現代のコミュニティの現状が、過去在りし日のコミュニティの状態に戻れるわけではないので、昔ながらの伝統的・保守的な地域社会の協力を再び復活させるということは求めるべくもなく、市民や地域住民が、新しい模索を始める必要性を感じることは当然である。

また、本学の位置する大塚地区にもその例外ではない。そ

のような市民の取り組みが、区の行政や近隣の大学と連携しつつ、徐々に活発化しているところであり、大学の設備と人材を生かして、それらの要請に呼応する必要がある。

芸術が人と人、人と地域とのつなぎになるという考え方は、地域に関わるプログラムを実施した本学関係者は誰でも実感していることであろう。本学芸術学部や芸術資料館は、そのようなニーズにふさわしいものを提供できる可能性がある。

年齢層は問わず、場を提供し、専門的なアドバイスを必要に応じて加え、また、成果を発表、公開することにより、参加者の成長を再確認できるという、教育・研究機能の一部を活用した内容を提供できるのではないか。大学には、そのような貢献に必要な設備と人材が揃っているといえよう。

このような複雑な現在の社会の状況があるなか、プロジェクトで積み重ねて来た実績を踏まえながら、地域貢献のプログラムや場づくりに生かしていく必要がある。

市民と協働しつつ、地域でのつながりや、新しい地域コミュニティを生み出すような場を醸成することは、現在の社会状況のなかで必要性が高い取り組みであるといえる。芸術には《社会関係資本》を醸成する力があるのではないだろうか。

参考文献

書籍

大塚かぐや姫プロジェクトチーム編「大塚かぐや姫プロジェクト 2006-2009 平成19・20年度 広島市立大学指定研究報告書」広島市：大塚かぐや姫プロジェクトチーム、2009

加治屋健司、今井みはる、鹿田義彦編「広島アートプロジェクト 2008」広島市：広島アートプロジェクト実行委員会、2009

ロバート・D・バットナム「孤独なボウリング：米国コミュニティの崩壊と再生」東京都：柏本書房株式会社、2006

寺尾佳子、湯浅ひろみ、廣戸絵美、寺林武洋編「光の肖像」展 2005 展覧会図録」広島市：広島市立大学芸術学部油絵専攻内「光の肖像」展実行委員会、2005

「キッズキャンパス2005 報告書」広島市：広島市立大学芸術学部、2005

高崎経済大学附属産業研究所編「大学と地域貢献」東京都：日本経済評論社、2003

衛紀生「芸術文化行政と地域社会」東京都：株式会社テアトロ、1997

新聞

「町ぐるみアートでにぎわい」『日本経済新聞』、朝刊、2010年1月1日41面

志水宏吉「学力格差は「きずな」の差」『日本経済新聞』、朝刊、2009年11月30日21面

「子ども会 加入率低下転換期に」『日本経済新聞』、朝刊、2009年8月20日32面

「NEWS な数字 340億 1700万円 カルチャーセンター売上高」『日本経済新聞』、朝刊、2009年1月18日7面

統計

国立社会保障・人口問題研究所「人口統計資料集」2009

新聞協会経営業務部調べ「新聞の発行部数と世帯数の推移」2008

経済産業省「特定サービス産業動態統計調査」2008

芸術資料館の可能性

大学美術館が大学にもたらしたもの 薩摩 雅登

東京芸術大学大学美術館の薩摩と申します。今日はお招きいただきましてどうもありがとうございます。広島市立大学については、以前からいろいろと聞いてはおりましたけれども、来るのは今回が初めてです。

先程この施設を見せていただきまして、非常に立派なので驚きました。いろいろと思うこと、感じたことなどは座談会のほうに譲りまして、まずは私に課せられた報告をお聞きいただきたいと思います。

お手元にお配りした、東京芸術大学大学美術館のパンフレット資料を基にしながら進めていきたいと思っております。

最初に自己紹介をしますと、私は早稲田大学、大学院と美術史学の研究を続け、今も個人的に細々と続けているのは西洋中世の教会建築、彫刻、工芸など宗教美術です。しかし、日本で西洋中世の研究者としてやっていくのでは、なかなか仕事にならないので、東京都の学芸員になりました。

そこでは学芸員としての仕事ができると考えていましたら、東京都の現代美術館の準備室に回されまして、総工費450億円という、巨大な美術館の建築担当になり、着工から竣工まで関わってやっておりました。

その美術館がようやく竣工しまして、さあ、これからは学芸員としての仕事ができるのかと思っていたら、今度は東京芸術大学が美術館を作るから来てほしいということで、東京芸術大学に移りました。

結局、1990年代は、1994年に開館した東京都現代美術館と、1999年に開館した東京芸術大学大学美術館という、2つの組織も運営も異なる大きな美術館の建設に携わったということです。

そのために、その後は、なにやら美術館建築屋みたいな評価もされてしまっているのですが、森アーツセンター、あるいは地方の美術館ですとか、あるいは私の地元の東京都小金井市の小さな美術館など、美術館建設や立ち上げに関するような仕事に多く関わるようになりました。

そういうこともありまして、今日ここにお招き頂けたのだと思っております。このような立場から、今年でちょうど10年目になろうという、1999年に開館しました東京芸術大学の大学美術館の設立について話していこうと思います。

10年前に開館したと申しまして、その時に初めて忽然と美術館が立ち上がったということではありません。東京芸術大学は創立120年ほどの歴史があります。こちらの大学もそうでしょうけれども、大学を立ち上げる時というのは、当然のことながら、教育研究に必要な資料の収集が条件付けられております。ほとんどの大学の場合には文献資料の収集で、図書館あるいは情報センターでの資料の収集保存ということになると思います。

東京芸術大学の前身の東京美術学校と東京音楽学校を立ち上げるときには、当然のことながら、文献資料だけではなくて、いわゆる芸術資料、美術資料、音楽資料の収集が必要になってまいりました。

岡倉天心が中心となっていた東京美術学校の開設準備室の「図画取調掛」と、伊沢修二が中心でありました音楽学校の

開設準備室の「音楽取調掛」では、その頃から資料の収集が始まっております。

ですからこれらの資料は、あくまで、その後に開校される美術学校、音楽学校での教育研究のための資料ということで収集したものです。その当時収集したものが今となりましては、非常に貴重な収藏品となり、その中には狩野芳崖の「悲母観音」もありますし、明治時代の貴重な楽器なども残っております。

そして、その後も教育研究に必要な資料の収集が続きました。それと同時に、「学内の教育研究の成果」の保存ということで、卒業制作品を収集してまいりました。これは最初のころは殆ど全部の卒業制作を収集していたのですが、それではいずれ収蔵施設の不足という問題が起きます。1925年・大正14年に、当時の校長の正木直彦の英断というのでしょうか、全てを保存することを中止しまして、それ以降は、基本的には買い上げの作品の収集が現在まで続いております。

東京美術学校から、それに続く東京芸術大学は、教育に必要な資料、研究に必要な資料を収集すると同時に、学内の教育の成果、研究の成果を保存してきたということになります。

「図画取調掛」と「音楽取調掛」

当初は文庫と呼ばれておりました施設に美術資料ばかりではなく、書籍、本も収集されてきました。しかし、図書館と美術館とを同じように考える人が今でも沢山いますけれども、図書館の管理の仕方と、美術作品や造形作品の管理の仕方というのは、根本的に異なります。図書館というところは基本的には本を表題、あるいは、目次で分類していきますが、音楽資料や美術資料というものは中身まで吟味しないと、保存もできなければ、管理もできないということで、管理の仕方がまったく違います。

1965年に図書館と芸術資料館が分離して、別の組織として所蔵品を管理することになりました。ただ、その頃の芸術資料館は、教員が配置されているというような組織ではありませんでした。配置された事務職員は3年ぐらいで交代していきます。ですから、その時の担当者によって異なり、この方はすごかったと感心するくらい非常にシステマティックで、素晴らしい管理の仕方をしていた方もいらっしゃいますし、この方は3年間何をやっていたのだろうというようなこともあったりします。長い間、その両方の状況がありました。

そうこうしているうちに、学内のほうから、東京芸術大学での教育と研究の成果を、先生の作品も含めて、もっと積極的に発表していく美術館が欲しいという声が上がって来ました。

ちょうど細川内閣の第一次補正予算が挙がる時に、上野エリアの再生計画があり、その流れで国立科学博物館の新館ができたり、国立西洋美術館の21世紀美術ギャラリーができたり、東京国立博物館に新しい施設が建ったりしました。後から噂で聞いたのですが、その時に美術学部が出した美術館計画の申請というのは、作家の視点から作られた、非常に展示室重視の計画で、それが文部省のほうで通らなかったということで、そこからいろいろな修正や改変をしても通らないので、私と呼ばれたということがあったようです。

ちょうどその頃から、文部省の学術審議会のほうでユニ

ヴァーシティー・ミュージアムという構想が持ち上がってまいりました。

大学（ユニヴァーシティー）のシステム、あるいは、博物館・美術館（ミュージアム）のシステムというのは、これはどちらも近世のヨーロッパの啓蒙主義と市民革命以降に大きく発展したものです。

日本では明治維新以降にこのような組織施設（システム）が充実してきたのですが、博物館・美術館の場合には、中身がどうしても、ハードが整っている割にはソフトが脆弱という状況にありました。私も東京都美術館にいましたので分かりますけれども、組織が脆弱、コレクションも貧弱で、予算も人員も不足していて、学芸員の方の学問的良心と情熱が支えているような美術館もあるように思います。

その一方で、明治以来の100年近い伝統を持つ国立大学の中には、さまざまな資料が、それも秘蔵といたしましうか、あるいは死蔵されているようなものが沢山あります。そういう中でのユニヴァーシティー・ミュージアムという構想は、それら資料を体系的にきちんと整備し、大切に保存し、展示できる体制を作るべきだという構想です。

その構想に則りまして1996年に東京大学総合研究博物館が立ち上がり、1997年に京都大学総合博物館が設立され、1998年には国立大学博物館等協議会が発足しました。このように、大学内の資料館や芸術資料館などがミュージアムシステムに改変され、改組されるという状況が相次いでおります。これらは殆どの場合には総合大学ですので、所蔵資料は学術資料、標本資料が多いものです。

そのユニヴァーシティー・ミュージアム構想に、我々東京藝術大学も則りまして、ユニヴァーシティー・ミュージアムとして構想を進めて、文部省に通りました。1995年の春に計画を立てて、秋ぐらいに予算が付きまして、それから一気に建設を進めて、1999年10月に開館したということになります。

博物館の世界では最近では資料を「文化資源」というような言葉でも呼びますが、東京藝術大学の大学美術館所蔵の資料は、約9割が美術資料で約1割が音楽資料です。従いまして、博物館ではなく美術館と名乗っておりますが、システムとしては芸術資料に特化したユニヴァーシティー・ミュージアム、大学の博物館ということになると思います。このようにして立ち上がりまして、現在は専任の教授2人、准教授2人、助教2人、それから非常勤4人の人員で、関連講座2講座が成立しており、それに美術学部から兼任の先生が加わるという組織で運用されております。

現在どういう活動をやっているかと申しますと、この美術館をつくる最初のコンセプトというのは、明治時代から、ダンボール箱の中に上から積み込むように収集されてきた資料を、すっきりと整理、再編して、もう一回、今後活用できる新たな資源にしていこうというコンセプトです。

それから学内の教育研究成果をなるべく広く公開して、広い方々に見ていただき、評価していただき、そして、その中の主要なものを保存していく、そういう趣旨で立ち上がったものです。

今の国立大学はいろいろと予算が厳しくて、資料収集は購

入ではなく、寄贈や学内で制作されたものを収蔵しているだけですけれども、コンセプトに則りまして収蔵品の再調査、展示、保存その他の活動を行っております。

活動を始めてみると結構いろいろな成果が、細かいところを含めて出てきます。例えば具体的な例を挙げますと、明治時代の横山大観の『四季の雨』は、春夏秋冬を描いた4幅があるのですが、再調査してみると、ずっと言われてきた「春」と「夏」は入れ替わってまちがっていました。その作品を他の美術館にお貸ししても、その美術館でも「春」と「夏」を逆に展示していたということで、誰も疑わずに100年間、入れ違っていたわけです。このように、ちょっと新しい目で見ると、新しいことが分かったりします。

あるいは、19世紀の大変な作家だと思いますけれども、日本画と蒔絵で活躍しました柴田是真という作家の『千種之間天井緞織下図』は明治宮殿、戦前の皇居の天井画の下図です。天井画といってもこれは西陣で織った織物を張っているものですが、戦争中の空襲で明治宮殿も焼けてしまいました。その下図が全部、我々の美術館に残ってまして、これを研究するだけでも十分に一冊の大著になりましたし、1回の大きな展覧会もやりました。この他にもこのような成果として、結果的に非常に大きな活動、成果になってきていることがあります。

東京の上野という場所に美術館施設を抱えますと、外からいろいろな依頼がまいります。新聞社から来ることもありますし、あるいは地元の台東区からの紹介のものもあります。やはりこちらとしても、いわゆる学内の作品だけで全部の展示室をフル稼働させることはできません。空けておくよりは有効に利用したほうがよいか、というくらいの気持ちで、外からの「持ち込み」も条件によっては採用することにしました。

この条件とは、この美術館、大学の美術館を「貸し会場」にはしないことです。外から依頼があった場合にも、かなり早い段階から、美術館の教員あるいは美術学部の教員など学内の常勤教員が必ず企画に入ること、そして、こちら側の先生が軸になって企画を進めていこうということ。そういった方法で外とのコラボレーションを続けてきましたところ、結果的に非常に面白い成果が出てまいりました。

それ以前は、大学と他の機関との連携、あるいは地元との付き合いというのはあまり無かったのですが、この美術館というところを、大学の窓口というのでしょうか、学内に学内外の人が集まれる場所として、学外の機関と連携していく、学外と学内がひとつのチームを作って連携するという発想が芽生えてまいりました。

特に、今のところ、大きな成果を挙げているのが、地元との連携で、地元というのは東京都美術館との連携とか、東京都国立博物館との連携です。すぐ近くにありながら、企画と企画の連携がなかった機関が連携できるようになりました。あるいは地元の台東区との関係も随分密になってまいりました。

それともう一つは、これは驚いたのですが、大学という

ころの特性なのでしょうか、極めて国際的に活動ができるようになってきました。それ以前でも先生個人は海外研究者との様々な共同研究があったのでしようけれども、大学側でひとつのチームやグループをつくって、海外の美術館、あるいは海外の機関との連携をとるといことがなかなか無かったのですが、こういうことができるようになってきました。

最初は新聞社などのメディアが大学美術館での展覧会開催を依頼してきましたが、次第に当館の発言力が大きくなってきました。具体的な例を挙げますと私がたまたま担当した、去年の「バウハウス・デッサウ展」（2008年4月26日～7月21日）です。

ドイツ、デッサウのバウハウスでも今までは所蔵資料をあまり活用できなかったのですが、新たな活用を始めようということ企画がもちあがりました。最初は現在のバウハウスの紹介のような内容だったのですが、デッサウのバウハウスに出向きまして収蔵庫を見ましたら、中には興味深い作品が多々ありました。バウハウスというところで活躍した大作家やデザイナーが有名ですが、バウハウスの収蔵庫の中には、その当時のデッサウ校舎で学んでいた学生の作品も沢山ありました。つまり、バウハウスで、どういう教育がされていて、学生がどういうふうな作品を作っていたかというのを、東京藝術大学に持って来て紹介したら面白いぞということで、やってみようということになりました。

バウハウスと新聞社と共同で準備しましたが、とても東京藝術大学の美術館だけでは展覧会としての採算が合いませんので、他の美術館にも参加してもらって、なんとか実現できました。そして、東京藝大の後に全国で巡回展をやっております、今は宇都宮でやっています。ここが最後の会場ですので、ドイツから借り受けた作品を受け取りにドイツから学芸員が来ますので、今度の日曜日には私も宇都宮に行きまして、またお互いに作品を点検するという仕事はまだ残っております。このように本当に面白い実りのある成果がありました。

ということで、大学に美術館ができると、意外なほどに、地元の台東区という割合近い辺りから日本全国との繋がり、さらには海外といましようか国際的な繋がりができてきました。結果的に今は、地元と国際という二本立てになっているような気がします。これは大学ということを考えますと、学内的にもいろいろな意味で活性化になったと思います。大学や学部あるいは学科がこういった学内外の美術館などの諸機関と関係を持つことによって、科を超えた連携ができて、学内的にも美術館が一つのセンターになっていったと思います。

美術館では、そういう連携という成果に加えて、学内の教育研究成果を即座に公開できるという成果もあります。例えば前年度から始めたのですが、最近は課程博士で博士号をとる学生が20人位いますが、今までは各科の中で博士号を出して、それを形式的に研究科運営委員会で承認していました。しかし、海外での博士号の審査というのは、論文を出して、公開審査で先生方に講評してもらった形式が一般的です。

それで、芸術の分野での博士号はどういう方法があるかと、いろいろと検討しました。その結果、昨年度からですが、毎

年12月に、博士課程の学生全員が大学美術館全館を使って作品を展示します。最近ではインスタレーションとかいろいろな作品がありますし、そして論文のほうは、その作品に関係する論文が多いので、美術館内のあるコーナーに発表できる場所を作って、そこで完全な公開審査を行いました。

ですから、その指導の先生方だけではなく、他の科の先生方、あるいは、他の大学の学生も公開審査に来ることができるようになります。展覧会という形式を取っておりますので、誰が来てもかまわないということで、かなりシビアな公開審査になっているということです。これもまた学内の教育研究成果の公開ですし、そして、学生は最初から社会の批評を浴びることになります。そしてそれをパスした作品の中の秀逸なものは美術館に収蔵して、さらなる評価を仰いでいく。そういう活動が、今年度が2年目で、これからもずっと続いていくことになるかと思えます。

これは学生にとって非常に刺激になることで、だいたい作家の方々というのは、作品を作ることは一生懸命でも、展示ということに関してはあまり熱心でないことが多く、あるいは、自分の専門は研究するのだけれども、展示技術は必要ないと思っている方が多いのですが、そういうことがなくなってくるのです。

作品を作ることと、それを展示する能力とは、別のことで、展示もしっかりと勉強しないと、なかなかうまくできません。作品の公開と論文の公開を美術館ですということになると、学生は展示の知識、公開の方法なども勉強します。これは、この先々に自分で自分の作品を展示する機会があるか分かりませんが、多分、将来、作家として活動していく中にも、何らかの糧になっていくだろうと思います。

大学美術館の施設を紹介してみたいと思います。この大学美術館は、かなり贅沢な施設を持っております。パンフレットをお配りしておりますので、ご覧になっていただけたと思いますが、これが10年前に開館しました東京藝術大学大学美術館の本館部分であります。もともと実験的・学術的なことをやろうという意図もありましたので、個性の異なる4つの展示室があります。



簡単に申しますと、地下の展示室1は、基本的には平面作品を展示するのに適した極めて伝統的な展示ケースと可動壁がある、そういう普通のものです。

展示室2のほうは、これは多目的に使おうという展示室で、スポットライトのみの照明です。スポットライトが付いてい

る状態でも可動壁が動いたほうが良いということで、スポットライトが埋め込み式になっておりまして、スポットライトが付いていても可動壁が動くようになっています。

ヨーロッパのロマネスクの教会堂をイメージしたような3階の展示室3ですが、インスタレーションやパフォーマンスにも使える空間として、ホワイトキューブの展示空間になっています。ここは自然光の導入も可能です。



展示室3に続く展示室4は小さな展示室で、ここは完全に暗転できる展示室として、展示室3の付属のように付いていて、照度制限のあるデッサンや素描の展示とか、映像上映などによく使用します。

芸術資料館の時代には、収蔵庫は他の場所、現在では旧館と呼ばれる建物にあったのですが、その頃から展示ギャラリーとして使っていたのが現在の「陳列館」です。昭和2年の建築で、19世紀的なヨーロッパのミュージアムの発想による施設で、1階と2階があります。建物が出来上がってきた頃には電気照明は今のようによく充実していませんでしたので、自然光を取り込みます。

1階は南側と北側に窓があって、自然光を取り込み、立体作品の展示に適しています。立体作品の照明の基本中の基本は、片方からスポットを強くあてて、もう片方からも弱い光がくる。これが立体作品照明の基本ですが、南側と北側に窓があるということは、南方から強い光が入る、北側から弱い光が入る、ということで、電気照明のない頃の伝統的なヨーロッパの彫刻の展示スペースです。

2階の部分ですが、壁がかなり高くして5m以上あり、天井に3方向に窓があります。つまり、そこから光が入り、その下の壁に広く反射して光が広がり、下に行くほど光が均一化して、視線150センチくらいのところでは、3箇所からの光が殆ど均一化する、つまり、平面の作品を展示するのに適しています。

これは、自然光を利用するような時の、ヨーロッパの伝統的・典型的な展示の考え方がそのまま採用されている建物で、大学の先生が自由に使っていたかのように貸しギャラリーのように使用している空間です。

それから正木記念館。これは、正木直彦校長を記念して昭和11年に建設された建物ですが、純和風の展示空間です。1階は、彫刻に適した空間になっておりまして、ここもやはり、南側と北側に窓がありまして、南から強い光、北からは

弱い光を取り込むという空間です。それから、2階は完全な和室で、書院作りになっています。日本の伝統的な美術を鑑賞する空間というのが書院と茶室ですが、ここは書院の空間です。ここには64畳と床の間がついておりまして、いわゆる日本の伝統美術の展示、あるいは、日本画の模写、展示などに使っています。その一部には、茶室にも使えるように水屋も付いています。

関西には、こういう空間が沢山あると思いますが、東京美術倶楽部にはこういう書院造りの空間がありましたけれども、それが今、建替えて無くなったので、関東では公共的な場所としての純日本的な展示空間というのは、この正木記念館だけだと思います。

それから、東京藝大は茨城県取手市にも校舎がありますが、そこに、収蔵庫不足を解消することを目的に、いわゆる蔵の機能としての収蔵庫と小さな展示室があります。ですから、現在は、収蔵庫は上野の本館に4つ、旧館に2つ、取手に4つ、全体で10の収蔵庫を確保して、恵まれております。展示空間としては、普段は、本館、陳列館、正木記念館、取手館、それらの4つの館を使いこなしながら、機能しています。

芸術資料館から大学美術館に機能が移りまして、当初の予定でありました、すでにある既存の資料の再調査、再整理、保存管理、展示、そういった活動を続けてまいりました。また学内の研究成果をなるべく早く、学内外に公開していく。そして、周辺の地域とくに地元との連携事業と、国際的な連携事業ということが浸透してまいりました。開館して10年経つのですが、これからもこの活動は続いていくと思いますし、今後も、続いて行けばと思っています。そういう立場から、お話をさせていただきました。

大学は伝統があり、組織も大きく、先生方の人間関係はなかなか複雑です。成果が現れるまでには、いろいろな微妙な調整が必要で、沢山の先生方の協力を得ながらこれまでやってきました。

この10年の間に、組織的なことはいろいろあったのですが、美術館ができたことによって、学内でのチームワークというものが非常に取りやすくなり、目的に向かって、グループを作ることができるようになってきました。そして、今までは先生方や学生を含めて誰がどこで何をやっているのかなか分からなかったのが、美術館を通じて公開され、全体像が見えるようになってきました。それと連関し、結果として、地元との関係、国際的な関係などが活発化してきたということがあると思います。そういう点で、大学内に美術館という組織施設を設置したことは非常に意味があったと思います。

それでは、これで終わります。ありがとうございました。

広島県立美術館の松田と申します。東京藝術大学の薩摩先生のお話を拝聴しましたが、薩摩先生とは、さきほどお久しぶりですという話をしていました。実は私が大学生の時もお会いしたことがありました。

また、学芸員になってからも文化庁の研修で、東京文化財研究所へ行ったり、東京藝大の芸術資料館のコレクションを見に行ったりしたことがありますが、そこで、薩摩先生から新しく東京藝術大学の美術館が建ちますよという話を聞いたこともありました。

身の回りに起こることは、偶然は意外と少なく、ある程度必然的なことが多いのではないかということをつくづく感じる今日このごろです。最近感じるのは、年を経ているような経験を積んできて、それらのご縁が、今に繋がっているなど感じます。

さて、今日のテーマは、「広島県立美術館と地域連携」です。美術館といっても、いろんな美術館がありますので一概に言えないのですが、典型的な県立の美術館として、広島県立美術館の地域連携の活動を具体的に説明していこうと思います。

美術館は、常設展のほか、特別展や企画展を実施していますけれども、昨年、企画展として、「ル・コルビュジエ 光の遺産」展（2008年8月1日～9月18日）の開催がありました。

四日市立博物館と当館、その後縮小されてメルシャン軽井沢美術館で巡回された展覧会です。ただ昨年、2007年には森美術館でも大規模なコルビュジエ展が開催されておりますが、これとは別の展覧会です。

最近、上野の美術館で話題になったのは、コルビュジエが設計した国の重要文化財（建造物）の国立西洋美術館本館が世界遺産暫定リスト登録されるのではという話でした。国立西洋美術館本館は、フランスの建築家コルビュジエの設計によるもので、2007年には国の重要文化財となりました。2008年には世界各国に点在する作品を一括して世界遺産一覧表への記載物件として共同推薦するものです。そのコルビュジエについての展覧会です。（*2009年7月現在、世界遺産への登録は見送りとなった。）

この展覧会では、絵画や彫刻の他に建築関係の資料も重要な展示物なので、模型とか映像とか、図面とか、そういうものが気になるわけです。建築模型に関しては、地元の広島大学の工学研究科建築意匠学研究室千代章一郎教授ゼミナールで製作していただけることになりました。

教育プログラムとしては、地元、安田女子高等学校という高校があり、ここの美術の先生は広島市立大学のご出身で、前から知り合いだったこともあり、コルビュジエ展のときに教育プログラムと一緒に考えて実施しようと思われました。

最初はなかなか交渉に時間がかかったのですが、一つの研究授業を設定して、その内容について、各高校の美術の先生方が、意見交換をするようなモデル授業としてやりましょうということになりました。広島県高等学校教育研究会美術工

芸部会の研究授業として「広島でル・コルビュジエを探せ」というテーマで実施しました。

これまでこのような内容のプログラムを実施した例がほとんどなかったということと、学校の先生を始め生徒のみなさんもコルビュジエをまったく知らなかったということもあり、安田女子高等学校へ向かいて行って、合計4回程度、展覧会の開催前にその内容についてクラスごとに授業を行いました。その後、高等学校の美術工芸部会の先生方や美術部顧問の先生方の研究会でもこの授業について意見交換をしました。

展覧会自体が開催されてからは、展覧会を実際に、生徒に見に来てもらって、美術館学芸員のギャラリートークの作品解説を交えて、作品鑑賞をしてもらいました。その後、夏休みに入る時期だったので、生徒達にフィールドワークとして、自分が住んでいる身の回りのコルビュジエ的な建築デザインを探すと課題を出しました。広島市内にはコルビュジエの影響を受けた典型的な建築があるということ事前に伝え、具体的な答えを探してもらいました。

コルビュジエのデザインの特徴は、連続する窓や、高い床を柱で支えたピロティなど。それはバウハウスのような建築にも通じるものでもあります。それと、屋上部分には屋根をつけず、直方体などの幾何学的な形態を使用するという特徴もあります。また、連続的な縦の棧（ルーバー）が全面ガラスの壁面に配置されています。

これらの特徴を知り、多くの生徒さんたちが「平和記念資料館」をコルビュジエ的な建築物だとして探し出しました。これはコルビュジエの孫弟子にあたる建築家である丹下健三の建築です。戦後の復興期に建てられたコルビュジエ的な建築デザインが、広島にあるということ、現在でも広島を代表する建築として使われているということ、高校生に実感してもらえたと思います。

作業としては、広島にあるコルビュジエ的な建物を見つけたら、建物の写真を撮ってきてもらい、今回新に作ったシートに写真を貼り、コルビュジエ的な建築だと思った理由や、今後の建築はこうあるべきだという自分の理想の意見をイラストなどで描いてもらいました。これらは展覧会の会期中に開いた研究発表会で発表してもらいました。その際、広島大学の千代先生にも出席していただき、コメントをいただきながら、来場者の方に聞いて頂くという形で実施しました。

東京藝術大学大学美術館でも2008年に「バウハウス・デッサン展」を開催されていますが、バウハウスをテーマにした展覧会は前例があります。地方の公立美術館の団体で「美術館連絡協議会」というものがありますが、この団体と読売新聞社が協力して2000年の9月27日～10月22日に「バウハウス展」という企画展を行いました。この「バウハウス展」は、バウハウスのコレクションとしては国内最大を誇る、住宅メーカーのミサワホームコレクションを中心として、広島県立美術館や宇都宮美術館など国内の美術館所蔵の作品を加えて、総数283点の絵画、工芸、家具、建築資料等を展示し、広島での初めての本格的なバウハウス紹介の展覧会となりました。

この時も教育プログラムを実施し、夏休み中の広島大学付

属東雲中学校の1年生の生徒に、広島市内でバウハウスの建築を探してもらいました。「広島でバウハウスを探せ」というタイトルとテーマです。建築を鑑賞するときは、常に街に直接出て行って鑑賞する必要があります。

生徒たちは、大人たちからすると「こういうのもバウハウスのなのか」というぐらい、モダニズムの建築やデザインを沢山挙げてくれました。バウハウスのデザインは、非常に、合理主義・機能主義・経済的なデザインで、工業化、近代化、大量生産に寄与したデザインです。この時も展覧会の会期中に美術館の講堂で、広島大学工学部教授の杉本俊多先生にコメントしていただきましたが、非常に独創的な発表もありました。

建築の展示や、今は存在しないものや見られなくなった物の展示は、CGで再現することが最近では多くなっています。この「バウハウス展」開催にあたって、広島大学の杉本先生に相談したところ、広島大学にバウハウスの校舎などの膨大なデータがあるということでした。その時「バウハウスの広大な校舎をCGでアニメーションにできる」ということをお聞きしたのですが、そのCGの制作費が捻出できそうもないことを申し上げましたら、自分が付き合いのある、建築系の会社にコンピューターを無料で貸してもらうことになり、制作作業は広島大学の大学院生にってもらうことになりました。

バウハウスの初代校長で建築家のヴァルター・グロピウスの校長室や、デッサウのバウハウスの校舎をCGアニメーションで再現し、展覧会会場で上映しました。これはおそらく世界初の展示であったと思います。

「KAZARI展」(2008年9月27日～11月9日)は東京のサントリー美術館と京都文化博物館に巡回した後、当館でも開催しました。

地元の「石田あさきトータルファッション専門学校」などをお願いして、「KAZARI展」に出展されている作品をイメージして、学生がデザインしたものを着て、美術館のロービーでのファッションショーを行いました。

専門学校の先生方も、美術館でファッションショーをしたという思いは、前々からあったようでした。そういうことも重なり、実現しました。

この展覧会は日本の過去から現代までの「カザリ」をテーマとしています。その中で現代のネイルアートも「カザリ」の範疇に入るということで、地元の専門学校をお願いして「ネイルサロン体験コーナー」を会場に立ち上げました。実際には「専門学校マインドビューティーカレッジ」「広島美容専門学校」「穴吹デザイン専門学校」「広島情報ビジネス専門学校」の4校の専門学校に協力してもらい、実費で、学生によるネイルアートの体験コーナーを会期中の土日に開催してもらいました。専門学校の学生さんたちも、技術や接客の体験ができ、いい勉強になるということでした。余談ですが展覧会のスタッフも時間を見つけて、爪の手入れをしてもらった者もいたということです。

ほかにも、広島県立美術館で開催する「KAZARI」の広報を兼ねて、その専門学校の学生さんがデザインしたファッションを身に包み、広島市中区本通り商店街と金座街を展覧

会のチラシを配りながらパレードしました。専門学校と展覧会の両方をPRをすることができました。

「日本伝統工芸展」(2009年1月21日～28日)は、伝統工芸作家の作品展で、文化庁が主催する唯一の公募展です。広島県内にも沢山の伝統工芸作家がいます。教育プログラムとしては、県内の小中学校、5校程度に伝統工芸作家を派遣し、制作指導をしながら伝統工芸の今を知ってもらおうという事業を実施しました。

広島県内には大小合わせてさまざまな美術館がありまして、広島県美術館ネットワークという組織をつくっています。ここの加盟館の美術館を会場にして、県立美術館の所蔵作品を貸し出して展示しています。これは年1回、各会場の美術館の学芸員と企画段階から事前に協議して実施しています。

また、県内の小中学校に学芸員が向かい歩いて、所蔵作品やパネルで作品解説をして鑑賞教育をする事業を年10回程度実施しています。

また、広島大学教育学部の先生の助言と協力の下に、当館の所蔵作品を対象に、鑑賞教材になるアートカードなどを開発し、美術作品鑑賞学習キット開発研究を共同で実施しました。

このように、特別展、常設展、収蔵作品展に絡んで、鑑賞教育の取り組みを定期的に行っていました。

さて、ここまでお話ししてきました広島県立美術館における地域連携の事業を分類して整理してみましょう。形式分類としては、①「アウトリーチ型」として美術館の所蔵作品を学校に持って行って、学芸員等が鑑賞教育を行うもの(「伝統工芸出張授業」「ネットワーク美術館」「美術作品鑑賞教育」)。②「共同企画・共同研究型」として美術館と学校や大学が共同して教育プログラムを企画実施し、鑑賞教育の方法や教材を研究開発するもの(「広島でル・コルビュジエを探せ」「美術作品鑑賞学習キット研究開発」)。そして③「研究委託型」として企画や研究を外部の学校や大学などに委託する方式のものがあります。これは適宜、美術館の企画意図の提示や意見の交換を行うこととなります(「KAZARI展」ファッションショー、「ル・コルビュジエ展」展示物の制作)。④「イベント・タイアップ型」としては特別展などの内容に合わせて、適合するノウハウを持つ学校・企業などとタイアップしてイベントを実施するもの。学生たちの社会参加、企業の地域貢献、双方の広報効果が期待されます(「KAZARI展」パレード、ネイルサロン体験コーナー)。⑤「友の会活動」として地域の住民の方に友の会のボランティア活動を通じて美術館をサポートしてもらうもので、所蔵作品展のギャラリーガイド、作品解説、広報支援、会報の発行などがあります。

他館の例としては、平成20年度文化庁芸術拠点形成事業(ミュージアムタウン構想の推進)のひとつとして、「LINK!ミュージアムからアートの風を!!」が開催されました。

その中核事業として、平成20年7月～11月の「アート竜

巻フェスタ」は、埼玉県の浦和市、川越市、入間市、鳩山市、川口市の5地域をめぐって6回のアートフェスティバルが実施されました。風車を設置して、市民が楽しみ、そこでパフォーマンスもできる、広域的なプログラムです。

この他にも現在、活発に、日本の各地で美術館と地域の連携が行われ、協働的な研究が実施されています。

近年、美術を通して地域住民が関わることでその地域を活性化する試みが各地で行われています。広島の地域には美術館が比較的多く存在し、住民と協働するにはよい環境だと思っています。しかしその活動は、美術館が直接中心となってやるよりも、むしろそれぞれの活動を繋ぐ役目、つまりメディアとしての役目を果たすべきだと思います。主体は地域にありますし、地域に根付いてこそ、美術も美術館も地域もともに活性化し創造的な関係になっていくものであると考えます。

ご清聴ありがとうございました。

※この原稿は口述で発表したものに基本に基づいていますが、適切な表現とするために若干の書き直しをしています。

はじめに

芸術資料館は本学開学当初に設置され、教職員、学生の研究・教育支援の役割を担い、大学と歩みを共にしてきた。

本学には同じく付属の図書館、情報処理センターがある。研究・教育支援目的ではないが、社会連携センターも大学の地域貢献、産学連携を推進し、学部・研究科などの枠組みを超えた取り組みを支援している。開学から 15 年を超え、いずれの施設も運営ノウハウの蓄積と業務の不断の質的向上に取り組み、実績を重ねつつある。

芸術資料館も企画展示、地域に公開されたプログラムなど、相応の実績を残したと言える。限られた人材、財源の中で多くの企画展示を行い、対外的にもその活動に耳目を集めた例も少なくない。

率直に述べるならば、芸術資料館の課題は多い。しかし、そうした瑕疵を凌ぐほどにその可能性に対する期待は大きく、多くの教員とともに芸術資料館の活性化、活用について取り組みを行ってきた。

また、芸術資料館の改善方策を検討することは、そこだけにとどまらず、将来像を求めることと同義であると言ってよい。理由については、順次明らかにする。

平成 20 年度特定研究「展覧会をつくる」の最終研究会では、芸術資料館を含む施設構想などの発表を行ったが、本論はその要旨を整理し、さらに課題の抽出をして今後の議論のための検討材料を提供し、いささかの提言を行いたい。

付属施設としての設置目的と機能

敢えて問うならば、芸術資料館の研究・教育支援という目的に異論の余地はないのだろうか。機能面から芸術資料館の存在意義を見直すことは、何を改善すべきか、何に向かって改善すべきかを明らかにすることになる。

現状、芸術資料館の持つ機能はほぼ以下に集約される。当初から想定された、本来的な機能である。

1. 収集、保存
2. 展示、公開
3. 研究、教育支援

項目は、実は非常に概括的で、広い解釈を招く可能性があるが、詳しくは後に触れることにする。これら機能を十全に行うとすると、すぐにもいくつかの障壁が想起される。

他の付属施設と芸術資料館の運営では、確立された運営主体の有無という点で、すでに相当の格差があるが、これが相応の懸案とならなかったのは、芸術資料館の目的、意義についての真剣な議論が欠如していたことに尽きるのだろう。あるいは、芸術資料館の現状の放置が大きな課題を生じさせそうにないと思えられていた状況を反映していたのだと思われる。しかし、果たしてそうであろうか。

上記 3 項目の内、2 番目までの機能は、多くの美術館で謳われているものである。これに以下のような項目が加えられたものが、美術館の基本的役割であり、機能と理解されている。

1. 収集、保存
2. 展示、公開

3. 研究

4. 教育、普及

言うまでもなく、これは「博物館法」(昭和 26 年) (*1) における第 2 条 (定義) と第 3 条 (博物館の事業) を要解したと見ればよいわけであるが、第 2 条には次のようにある。

「博物館」とは、歴史、芸術 (略) 等に関する資料を収集し、保管 (育成を含む。以下同じ。) し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、(略) あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関」(美術館は博物館に含まれる。)

法律に断られずとも、展示公開をする上で資料の調査研究が必要であることは、自明である。

芸術資料館が美術館であるのか、また「博物館法」の精神に制約を受けるのか、という議論は前向きとは言えず、充実した展示のためには、最低限こうした研究活動が必要であるという認識を起点に議論を深めたい。

さらには主に学内での研究・教育支援については、新たな研究領域、高度な研究の創出に寄与する施設とするような展望が描けないか、検討の価値がある。

近年、各地の美術館が注力しているのが教育・普及活動である。これは、「博物館」が「社会教育法の精神に基き、(略) もつて国民の教育、学術及び文化の発展に寄与することを目的とする」(第 1 条 (この法律の目的)) 法律によって規定されていることに依拠しているものであり、同時に、すでに美術館運営、経営にとって欠かすことのできない要件である。大学の地域における存在を考える上で、この「教育・普及」は当然注目すべき項目である。むしろ、芸術資料館が生涯教育、地域連携において果たすことのできる役割は、小さくなく、今後の運営に確実に反映されなければならない点である。

以上のような美術館の持つ機能は、芸術資料館の当初から想定された業務に限ったとしても、実は必須と考えるべきである。

新施設、新組織の配置など、将来的には新たな機能が加わることもあろう。夢見にとどまらず、将来的な展望の基に、現在の芸術資料館運営の改善にも整合性ある方策を提案したい。

芸術資料館の現状と課題

現状と課題を考察する上で、芸術資料館の目的、機能についての議論を先行させる必要性については前述した。しかし、すでに表面化し、対応を迫られている課題もある。

展示企画 相応の実績を積んだとする前述の内容とは矛盾するが、芸術資料館の本来的機能である「展示、公開」について、独自に企画運営を行っている展示は近年「新収蔵作品展」「教員展」のみである。

この 2 つの展覧会について、企画面で見べきものがないという指摘は残念ながら甘受しなければならない。関連する調査研究がなされた形跡もなく、図録発行もかつてない。原因を財源や人的問題に帰することは容易だが、見えざる損失に注意が払われないことはより深刻かも知れない。

美術館が企画する展覧会は、日常接している収蔵作品研究にとどまらず、企画に携わることによって担当がより広範な知識に触れ、人的交流の機会にもなっている。担当者すなわち学芸員のこのような経験は個人の研究業績として残るばかりでなく、美術館の知識と経験の蓄積となる。芸術資料館としても、同様に内容ある企画展示の運営経験は人材育成につながり、結果として芸術資料館運営の基盤が強化される機会と考えられるのである。

また、収蔵作品の充実、つまり「収集」とともにその「展示、公開」による活用はより芸術資料館の重要な責務となっているが、現在まで「収蔵作品展」企画が実現していない。収蔵作品は大学のみならず、市民の財産でもある。最も懸念すべき課題である。

こうした状況にも関わらず、ここ数年、芸術資料館を会場とする企画は比較的活発である。これは、教員が研究の一環で開催するものが毎年一定数あるためである。その背景として、芸術資料館の存在感と活用の意義が浸透してきたことが上げられよう。歓迎すべき変化であるが、これら企画のほとんどが単独回に限ったものである。

市民講座「展覧会をつくる」とその上部の研究では、継続性や一貫したテーマの必要性も鑑みつつ芸術資料館活性化への寄与を目的としてきた。この研究を担当した教員、スタッフは、専門外での関わりも多く、研究実績とは縁のない活動であっても献身的にこの取り組みに参画してきた。その多大な尽力と労苦については一言触れておきたい。

こうした取り組みがある一方で、芸術資料館が年間を通じてわずかな日数しか開いていない現実が変わらず、多数の来場者を迎える「教員展」でも質的内容に疑問を呈する声がある。正視すべき現状である。

収蔵スペースと作品保存状況 芸術資料館が最も期待される点は、美術、高等美術教育資料として価値ある資料が継続的に収集できる環境にあることである。収蔵品の充実に関しては、漸進的であっても確実な充実が見込まれるのである。

その中軸となるのが、主として退職時の教員作品、そして学生の卒業制作、修了制作の優秀作品の収蔵である。加えて、少数ながらも毎年の購入作品の蓄積がある。

研究や授業などで招聘した作家の好意による作品の譲渡や、教員の美術界における人脈も収集面に貢献しており、芸術資料館コレクションに独自の特徴を加えている。この大きな優位性から、やがて芸術資料館が中国地方有数の美術館に育つことは明白である。

一方で、収蔵庫の狭隘が数年内に現実のものになろうとしている。現状でも収蔵しきれない作品の保存状態について問題が散見されることから、これが重篤化する懸念をぬぐえない。

修復も将来的な選択肢になるが、少なくとも本学には収蔵作品の保存状態を良好に保つ責任が課せられている。新たな収蔵施設など、やがて対応しなければならない課題であり、その時期は遼遠とは言えない。

専門的人材配置 展示企画に伴う調査研究に携わる人材の問題についてはすでに触れた。必要とされる担い手の能力と

は、すなわち学識、研究能力を基礎とするものであり、これを備えた者が学生教育にも関わることに何らの不自然はない。実際に本学の芸術関連の開設授業では、多くの外部美術館の学芸員が教壇に立っている。

高い専門性を持つ学芸員が本学に配置されていないことが、展示企画の停滞を招いている事実は動かしがたく、加えて、その人材とは理論系教員の要員としても十分な資格を有していると見なせるのである。

多くの課題に関連して、この専門的人材配置の必要性がとり上げられることになる。

施設の品質 芸術資料館の価値は運用、活用次第でいかようにも極大化されるはずである。一方、現実の施設に関しては物理的な課題がいくつか指摘されている。

施設の改修、修繕の機会を待つことになろうが、以下に必要な改善項目の一部を列記するとどめる。

1. アクセシビリティ 広報をはじめ、学内の案内など総合的対応の改善。
2. アプローチ、入り口など、展示施設に相応しい、美観に配慮した改善。
3. 専門職員 (学芸員)、事務管理スペースがなく、これを解消すべき。
4. 一部可動壁など展示室の空間を損なう設備の改善

運営方針と将来像 冒頭にも記したように、こうして現状と課題を探ると、運営方針を含む芸術資料館運営の方向性や将来像にまで視野を拡大して方策を検討しなければ解決は難しい。

現状の放置や座視によって、後により困難で深刻な事態を招かぬようにしなければならない。

課題も多いとは言え、大きな可能性を持つ芸術資料館が今後どのような施設であるべきか。当然ながら全学的で広範な議論が待たれる。

芸術学部では「展覧会をつくる」等の活動を通じて、長く芸術資料館に対する教員の声、市民の声に耳を傾けてきた。以下に論じるので、議論の端緒としてもらいたい。

芸術資料館の可能性と将来像

短期間に実現することは困難と思われる点もあるが、芸術資料館の将来像の焦点を奈辺に結ぶべきか、提言を行いたい。それは、どのような芸術資料館にしたいのか、という問いに帰するものであり、そのために今後何をすべきかを明らかにするためのものである。

地域美術館 芸術資料館は本学における研究・教育支援のための施設である。この本来の目的を遂行するためにすべきことは多い。なおかつ、それだけでは不十分であることについても論じた。

さらに加えるべき点もある。芸術資料館は大学施設であるが、同時に地域の施設でもあるべきということである。

パブリックコレクションを擁し、公開を原則とした施設であれば、すでに公の施設であり、その社会的位置を自覚して

運営が考えられるべきである。大学付属施設であることで、過度に内向的になるべきではない。大学との適切な距離感を保った自立した施設という発想も必要であろう。大学における研究・教育に対する奉仕者であるだけでなく、自ら研究機関、教育機関としての活動を展開し、相互に刺激を与え合う対等な存在が目指されてよい。

地域美術館の意味するところ、またその理想とするところは地域との一体感であり、地域の一員としての美術館である。

地域貢献は本学建学の理念に謳われており、優先度の高い課題である。芸術資料館は大学と地域の接合点、交差点であり得ようし、そのための活動が求められている。

地域文化の創出、小中学校との連携や市民参加プログラムなどによって、芸術資料館を意識の上でも、物理的にも「共有される」存在に育てたいと考える。

美術館教育 地域美術館として、また地域貢献の拠点として芸術資料館を規定するならば、先にも触れたように教育活動をより推進すべきであろう。市民講座「展覧会をつくる」の取り組みで市民参加あるいは協働によってその意義を確認してきた。

博物館が社会教育法の精神に基づく法律によって規定されていることは前述したが、これに影響を与えたとされるユネスコ下部機構の国際博物館会議（ICOM）の最初の国際博物館憲章（1951年）では、まず博物館の収集、保存、研究、公開の機能をあげている。また、1965年にフランスの教育学者ポール・ラングランが提唱した「生涯教育」は急速に広まった。ロバート・M・ハッチンソンによる「学習社会（ラーニング・ソサエティ）」の発表もあり、その後のICOM憲章の改正（1989年）では、「博物館とは、社会とその発展に貢献するため、人間とその環境に関する物的資料を研究、教育及び楽しみの目的のために、取得、保存、研究、伝達、展示する公共の非営利的常設機関である」とされ、「研究・教育」と「娯楽」が目的であると明示されている。博物館の公教育機関、地域貢献施設としての役割が明文化されているのである。（*2）

これまでの取り組みから得たのは、教育は指導側と受講側との双方向の情報交換の場になり得るといえる経験である。教育は、それ自体、大学と地域を結びつける。

従来の美術館で言うところの教育・普及は、「普及」のための教育との色合いを感じさせるものであったが、芸術資料館においては教育の経験そのものが尊い行為であることを敷衍させてゆく取り組みを展開できよう。「研究・教育と創作の現場」である本学ならではの、教育のための美術館として特色ある活動を期待したい。

各地の大学美術館、博物館でも、地域連携が活発であるが、多くの事例で教育をその手法としており、特に京都大学総合博物館の「社会連携の要は生涯学習」との言及はそれを象徴している。（*3）

多くの報告から芸術分野における最も有益な社会貢献は「教育」であるとの認識が浸透しつつあることにも留意すべきであろう。（*4）

人の集う美術館 まず芸術資料館の価値ある活動によって

人を呼ぶことが重要である。教員、学生だけが見ればよいのではない。敢えて言えば、「人を呼ぶため」の活動はさらに重要である。「研究・教育」のための施設であることに囚われず、自由な立場で考えることも必要にならう。

教育の場としての矜持を懸念する意見も当然であるが、海外の大学美術館を中心に市民の求める心地よい経験、空間の提供に果敢な取り組みが報告されている。（*5）ICOM憲章でも「娯楽」を目的の柱としたように、美術館は「楽しみ」を提供する施設でもあるべきである。

優れた展示、興味深い教育プログラムが用意されていても、心理的なバリアが鑑賞者、来場者を遠ざけてはならない。その要素は、施設、内部の環境、スタッフと様々であるが、来訪したくなる環境を積極的、効果的に用意することも真剣に考えられるべきである。

金沢 21 世紀美術館の取り組み、成功は様々な教訓を与えるが、所蔵作品もさることながら、人を呼ぶ仕掛けに満ちている。（*6）

平成 20 年度に実施したウインターフェストとして光の造形を展開したプロジェクトは、直接的に展示と関わりはなく、美しい照明作品を見るために出かける動機を用意する仕掛けであり、また芸術資料館とその活動を市民と共有するためのプログラムであった。

市民参加 平成 16 年度から取り組んだ市民講座「展覧会をつくる」の目的の大きな要素が、地域に存在する人的資産の発掘と市民との協働の可能性だった。

広島においては、アジア大会開催の 1994 年を市民ボランティア元年とする見方があり、その後多くの市民活動、NPO 活動が興隆した。その流れを決定づけたのが、1995 年の阪神淡路大震災であることに異論はないであろう。

現在では、福祉、国際交流分野などに多くの NPO 団体が活躍しており、行政サービスもこうした団体なしには成り立たないのが現状である。

また、2000 年に導入された介護保険制度や 2006 年導入の障害者自立支援法は、行政サービスと市民の自助のあり方、相互扶助などの課題を浮き彫りにし、市民活動や NPO 研究を促進している。

一方、教育、文化芸術領域においては市民活動の動きは顕著とは言えない。さらに大学との連携となるとごく限られたものにならう。これまでの取り組みは、これら分野での大学と地域、市民活動との連携についての開拓的な提案となるはずである。

これまでの本研究の報告にもあるが、市民講座修了後もネットワークが機能しており、大学市民間の情報交換が円滑化されている。

なによりの成果は、教育や美術界における経験豊かな人材が大学、あるいは芸術資料館の運営に対して、協力、協働の意志を表明してきていることである。

芸術資料館の将来の運営にこのような人材は欠かせない。財源や組織の限界を打破する可能性を与えてくれるものであると確信している。

付帯事業の可能性 人が集い、学習機会のある美術館があ

るとすれば、さらに展開が期待できることもある。

第一にアートショップあるいはミュージアムショップでの開発商品や作品の販売である。また、良質のレストランやカフェはすでに美術館にとって必須の付帯施設である。こうした施設が軽んじられた美術館が多くの来場者を迎えることはないだろう。本学のロケーションと眺望は広島地域でも特に美しい。事業を検討する上で潜在的な高価値をもつ資産である。

大学と芸術資料館の将来

再度、大学にとっての芸術資料館の将来的役割について論じて結びとしたい。

展示・収蔵施設 収蔵庫スペースについての課題については先に触れた。現在の展示施設は一定以上の水準にあると言ってもよいが、アクセシビリティや文化的な空間演出に難があることも否定できない。

本学の立地を生かした、自然豊かな環境と融合した新施設に対する期待は高い。展示と収蔵の課題への最終的な解決策として早い時期の検討が開始されることを望むものである。

新たな研究創出 大学の研究・教育支援目的の面から、芸術資料館の果たす役割は今後も変わらない。

一方、収蔵作品という資産を活用した新たな研究創出にも寄与することが可能であろう。

平成 21 年度より文化財保存学に関する研究・教育導入のためのプログラムが実施され、指定研究にも採択されているが、学内に調査可能な資料を有する環境は、他大学に較べても抜きん出たものである。

この分野は特に異分野融合が盛んであり、研究の最前線では多くの若い研究者、学生も熱意をもって取り組んでいる。本学でも学際的研究の事例として発展することが期待される。

また、同じく収蔵作品の活用面では、デジタルアーカイブの整備も真剣に検討されるべきであろう。これも学際的研究につながるものであり、特に今後の美術館のあり方を考える上でデータ上の、あるいはネットワーク上の美術館概念については多くの美術館、大学で意欲的な研究、取り組みがある。

写真の利用からマルチメディアに移行し、美術館という「物理的な場の限界」を超えるものとして、「空想美術館」を提示したアンドレ・マルローは現代を予見したのである。

我が国でも先世紀 90 年代から未来のミュージアム像を模索し、各美術館などが取り組んだ「美術館の情報化」（*7）は、すでに普遍化した。情報端末も手のひらに乗る時代になった。情報科学部、芸術学部を擁する本学がどの時点からこの作業を本格化するか、検討すべき時期である。

文化交流活動拠点 芸術資料館の将来構想についての議論の中で多くの教員、また学外の識者から繰り返し期待が表明された施設がある。その筆頭がアーティスト・イン・レジデ

ンス施設である。国内外の作家招聘や文化交流のための施設を想定している。地域での文化活動を含む、広義の交流事業の拠点としても整備が待たれている。

同様に多目的スタジオ、あるいはワーキングスタジオの設置は、様々な地域連携プログラムにおいて学生、市民が共に利用できる施設として実現が望まれている。

受信と発信 美術館は記憶装置に例えられることもあるが、同時に発信装置であり、受信装置である。芸術資料館そのものが、芸術文化の価値を発信するとともに、大学の発信装置を担う。これをどのように大学として活用するかについては、芸術学部の問題にとどまらず学内での認識を広げる努力が求められている。具体的には芸術学部以外の研究成果発表などに芸術資料館の利用が検討されてよい。

また、芸術資料館は来場者を中心とした人的な交流、情報の集約、交換が自然に発生する場でもある。あるいは、大学の窓口に見える場合もあり、特に海外との交流などにこうした公的施設の存在は大きな役割を果たすことができよう。

全学的な視野からの芸術資料館のあり方検討は、活性化に大きな示唆を与えてくれるものであり、多様な意見が待たれている。

本論が有益な議論の一助となれば幸いである。



美術館を含む新施設あるいは新センター構想（模式図）

*1 「博物館法」法律 285 号、昭和 26 年 12 月 1 日。現行は法律 50 号、施行平成 20 年 6 月 11 日。
*2 駒見和夫「だれもが学べる博物館へ 公教育の博物館学」、学文社、2008、pp36-37
*3 大野照文 論議「大学博物館における社会連携：京都大学博物館を例に」『化石』83、日本古生物学会、2008、p23
*4 ニューヨーク・ファイナルハーモニーオーケストラの教育による社会貢献事業の報告など
*5 「Managing University Museum」OECD 2001；The IMHE (Institutional Management in Higher Education) seminar on university museum Sep.2000；Introduction「大学美術館の社会的役割」に多くの大学美術館の報告があふ。
*6 眞世「超・美術館革命—金沢 21 世紀美術館の挑戦」、角川書店、2007 など
*7 伊藤俊治「美術館メディア研究会編『美術館革命』、大日本印刷、1997、p3

平成 20 年度特定研究「展覧会をつくる」研究会
2009 年 3 月 26 日 広島市立大学講堂小ホール

セッションⅢ 座談会

「本学の課題と地域における大学施設のあり方について」

広島市立大学 芸術学部教授 芸術資料館長	吉井 章
広島市立大学 芸術学部教授	中嶋 健明
広島市立大学 芸術学部教授	前川 義春
広島市立大学 芸術学部教授	北田 克己
広島市立大学 芸術学部教授	伊東 敏光
広島市立大学 芸術学部准教授	観澤 達夫
広島市立大学 芸術学部准教授	加治屋 健司
広島市立大学 国際学部教授	大井 健二
東京藝術大学 大学美術館教授	薩摩 雅登
広島県立美術館 学芸課長	松田 弘

〔敬称略、職名は当時。発言内容をテキスト化したものですが、わかりやすくする目的で若干の修正を加えてあります。〕

北田：市民講座「展覧会をつくる」では教員スタッフも学科、専攻を超えて連携し、市民、学生も参加しました。学生も、それなりに手ごたえを感じられる経験になったと思います。ウインターフェストという名前になって 2008 年が 1 回目です。できれば継続的に進めていきたいと思います。このような芸術資料館を生かすための活動を続けていますが、芸術資料館活用の発展形としては美術館が考えられるかもしれません。ただ、一気にそこに行くよりも、私達が何をすべきかという問題をまず考えたいと思います。大学に美術館があったら、どういうことが起こるのかということについては、東京藝術大学美術館の薩摩雅登先生にお話をいただきました。

広島県立美術館の松田弘先生からは、美術館が度々、きめ細かく地域に発信されているお話をいただきました。広島市立大学にとって重要な課題というものはそれぞれにあると思いますが、芸術、美術に関する理論系教育が、美術館を軸に動いてもよいのではないかと考えを以前から持っています。そこには、保存修復が加わることもあるでしょうし、本学が今取り組んでいる都市の復元、文化の復興などが扱えると思います。美術館でさまざまな研究が交差するという場が考えられます。理論系教育の面にも触れていきたいと思っています。

薩摩：先ほど申しましたように、広島市立大学は前からお聞きしておりましたが、初めて訪問しました。素晴らしい建物で、学生数から考えると非常に恵まれた環境が整備されている大学だと思います。今、全国的に大学はある意味で転換期の厳しい時代に来ていると思います。原因は単純なことで最盛期 18 歳人口が 180 万人いたわけですが、平成 15 年に 150 万人を切りまして、徐々に減少しております。国立を含めて沢山大学ができていくので、このまま行くと、希望者全員が大学に入ることができるというような背景がございます。もちろんこれが悪いことだと一概に言えないわけですが、18 歳人口減を背景にして国立大学が独立行政法人化されました。文部科学省のいう法人化の本音というのは、予算の削減、

入学定数の削減、教授会の権限削減ということが目的でしょう。そして、経営その他に外部の意見、あるいは文部省の意見をもっと反映させていき、場合によっては潰れる大学は潰れる。国立大学を潰すわけにはいきませんから、独立行政法人化して、統廃合するという方針であるわけです。そういうなかで、大学は、安泰などころもあれば、かなり苦労されているところもある状況です。苦労されている大学には、二つのパターンがあります。

一つは、教育学部系など、数が過剰な学部を抱える大学です。もう一つは教員が、従来の発想から抜け切れない大学です。もちろん研究は絶対にしなければいけないのですが、そういう考え方で、それぞれが、ばらばらなことをやっている。つまり、教員の仕事は研究であって、自分がいい研究さえしていればいいという考え方で教員同士お互いの協力連携が取れないことです。あるいは、ある予算が下りたときに、その予算が各研究室に分配されるような計画を出す、先ず通らないですね。あるプロジェクトに向けて、まとまるべき教員はまとまって一つの目標に向かって進み、まとまったお金をつけるというようなことをやっていたらいいかと、やっていたらいいかと。今までのように、お金があったら、各学部等に等分にして、また、各科ごとに分けてというような発想でやっていたのでは苦しい状況になるでしょう。国立大学がそういう状況ですので、他の大学もだいたいそういうような状況に落ち着くのだらうと思います。

広島市立大学の教員の立場に立って考えてみたいと思います。大変ユニークな 3 つの学部があり、これだけの施設としてのハードと教員としてのソフトを持っていて、しかも市立ということで安泰な大学なのだろうとは思っています。しかし、現状をさらに積み上げていくには、何らかの目標にしたがって、それぞれの先生方がその都度、タスクフォースを組む、ある目的に向かって部隊を組んでいくということが必要なのだらうと思います。そういうためには、教員のソフトだけでなく、それができるようなハード的な規範があると、やりやすくなってきます。独立行政法人化という変化のなかでは、学部を超えた教員がチームを組みやすくなるような、システムを作る必要があるのではないかと思います。そのために、どういうものか、センターなのか、美術館なのか分かりませんが、そういう方向へ持っていく考え方は重要だと思えます。

例えば、5 年計画の予算を通すために、文部科学省に話を持っていくと、文部科学省はその事業にシーズとニーズがあるのかと問うてきます。我々がやりたいからやっているのではなくて、周りからの期待があるのでしょうかという、ニーズと、すでに活動を開始している種、シーズがあるかを必ず聞かれます。これは税金を使って何かやろうというとき、これからやりたいから、というものはだめです。すでに、「手弁当でがんばっていて成果が上がっているから、これからは少し予算を補助してください」とならないと、なかなかお金は下りません。そういう点では、「展覧会をつくる」は実績がありますので、いかに、実りあるものにしていくかということを皆さんで検討されてはと思います。

大井：東京藝術大学美術館のお話を聞きながら、人材の問題を考えます。東京藝術大学美術館には、専任の教授、助教授がいるということ。肩書きも東京藝術大学美術館の教授ということ、美術館に教員がいて、職員や役人ではないということ。千葉の国立歴史民俗博物館や、大阪の国立民族学博物館もそうなっています。形式にこだわるといっても、やっぱり大事です。それが、教授職を名乗らせると、研究、教育や、他の施設との交流に、結果がいろいろ影響してきます。それから、1996 年のユニバーシティ・ミュージアム構想は文部省学術審議会が提起して、新たに壮大な総合博物館構想というものが出てきたわけですね。どのとき、総合大学の東京大学、京都大学それぞれが、東京藝術大学の資料館に相当するなんらかの、建築物が無かったわけではありません。東京藝術大学の場合もその波に乗ったが故に、ずいぶん設立に苦労したとおっしゃっていましたけれども美術館ができました。

私は大学の総合博物館ということこそ、本学の一つの機関になればと思います。波に乗っていくことが大事なのだと思いますし、ネットワークが大切なのだと思いますが、その後のユニバーシティ・ミュージアム構想の展開はどうなったのですか。あまり進展がないですね。

薩摩：いわゆるユニバーシティ・ミュージアム構想ですが、紆余曲折がいろいろございました。1996 年の文部省学術審議会の報告その他で動き始めました。ただ、全国の主要大学博物館は東京大学、北海道大学など、新しく建ったところはそれほどないのですが、いままでの建物を建替えて、博物館系の建物が立ち上がっております。ちょうどそれが始まった後に、いわゆる大学の独立行政法人化という波がcaぶりまして、毎年、数パーセントから 5% づつ毎年予算や交付金が減っているという状況になっていますので、経済的な事情から未だに実現しない大学がございます。逆に面白いことは、やる気はあるのだけれどもお金が無いというときには、お互いに共通の問題があるせいかどうか、人間的なネットワークのほうは、非常に進みます。

全国博物館等連絡協議会というのがございまして、数年前から一年に 1 回は集まっているいろんなことを審議しています。最初は非常に盛り上がったのですが、途中から沈静化していたのが、再び活発化しています。今どういう動きになっているかと申しますと、大学内の博物館というと、専任の教員より、兼任の教員が多くいらっしゃいます。最初は、他の学部の博物館に関心の無い教員が兼務される。そうすると、3 年かそれくらいで兼任が交代する。そうすると、その人は連絡協議会には出られなくなってしまふ。そういう先生方の中からせつかく、関わってこれまで出てきたのに、出られなくなるのは寂しいということが上がって来て、1 回でも大学博物館に関わった先生達が、個人で集まれる場所を作ろうということで、今年の全国博物館等連絡協議会は鹿児島大学でございますけれども、博物科学学会という学会が立ち上がります。大学博物館、大学美術館で 1 回でも兼任をしたことがあって、こういう方面で関わってという人は個人で参加できる。博物科学学会が設立されることになりました。

当初これは、国立大学の博物館の中だけで起こったことですが、博物科学学会の門戸は開いておりますので、広島市立大学がこういう方向のことを考えられているのでしたら、ぜひ、館としても、全国大学博物館等連絡協議会に入っていただきたい。そこに専任の先生か兼任の先生かわかりませんが、やる気がある方は博物科学学会にも入っていただくと、活動発展の手がかりになるのではないかと思います。それぞれの大学博物館は専門分野が違いますので、それぞれに個性がありまして、東京藝大は芸術資料に特化したユニバーシティ・ミュージアムなのですけれども、ほかの大学は殆ど理科系の資料が多いのです。しかし、美術との関係は、絵画と顔料との関係も出てまいりますし、木とか石は彫刻と関わってきたり、版画に関する分子構造のアルファベットでも現代美術のオブジェみたいなものでもすし大変面白いものがあります。

あるいは岩手大学の博物館に行きましたところ、歴代の学長の油絵の肖像画がありましたが、始めは価値が分からなかったそうです。調べていくと当時の東京美術学校の油絵の先生が描いているということが分かりました。東京大学から、非常に有名な日本画家の、もしかしたら最高傑作ではないかというものが出てきたり、そういういろんなものが出てきます。大学の中にはいろんなモノがありますので、調べていくと、本当に発見があります。ネットワークで専門分野の違う博物館と協力して調べていけば、将来性があるかと思えます。京都大学の総合博物館は、理系の資料が多いということと、京都には科学博物館が無いということで、京都の科学博物館を目指しているということです。ここの展示の設計をされている方は、博学な方で、展示方法も独自のものがあり、非常に参考になりました。そういう大学博物館のネットワークがありますので、広島市立大学でも交流に使っていただくと、大学の専門分野を超えたところで、必ず学問にも学生にもいい影響を与えらると思えます。

北田：大学内の美術館といえども、ある程度、独立した組織というか、大学との距離感が大切だと思います。本学の芸術資料館は、例えば、館長が兼任でされて、嘱託の学芸員が一人です。あとは委員会形式で運営されていて、内部的な運営になっています。これはあまり活発な運営になりにくいと思います。芸術資料館はある程度活用されていると思いますが、独自の研究を積み重ねていかないと、教育、研究の刺激にならないと思います。独立すれば、他の専門分野の教員同士が、領域の交差した活動ができるという場を設定できるようになれるのではないかと感じました。

吉井：本学の芸術資料館のありかたを、中から見ている姿といますか、私自身が館長になって 1 年にならない状況ですが。北田先生が来られて 10 年といわれますが、制作者である一方、大学が何を展開して求めていくのかということ、育ててこれられているという印象があります。以前から主軸に

なってやっていただいている特定研究、指定研究等で力強い企画を立てていただきました。そういったなかで、芸術資料館の施設は、器としては非常にいいのではないかと評価があります。さて、中がどうだということになると、非常に厳しい状況にあると強く感じます。芸術資料館が立ち上がった頃の予算から、現在は半分になり、ランニングコストさえ厳しくなってくる現状です。松田先生にお伺いしたいのですが、県立美術館が独立行政法人化した場合に、集客ということはどうでしょうか。芸術資料館は、独立行政法人化に向けて、まだまだ厳しい現状というものがあります。というのは、芸術資料館の存在を知っている人は知っているのですが、学生が企画しても、横の学生諸君の連絡、周知が難しく、展覧会を知らないとか、なかなか工夫する余地があります。広島県立美術館がやっているところを見ますと、一つのイベントを打つのだったら、本通に出て宣伝するぞとか。昔、二科展なんかはお神輿を担いで練り歩いたとか。そういったことまでやらないと人が来ない。一番心配するのは、芸術資料館は、現状で人が来るのかという思いが非常にあります。それをどう運営するのかという問題のヒントをお伺いできればと思います。

松田：まず、お金を掛けずに広報して、集客を上げることを考えます。KAZARI 展のときの、学校側の協力については、参加する専門学校の生徒が社会に繋がっているという実感を持てる機会にしてほしいということでした。単に、広報のためだけに実施したのではなく、美術館という箱やメディアを飛び出して地域に入っていき、展覧会をやっていますよと知らせることが大事だと思ってやっております。地元のNHK 広島放送局開局 80 周年とタイアップするという仕掛けで、特別番組も制作してもらって展覧会を実施することもあります。年間を通じて公募展を別にして4、5本特別展をやっています。それは指定管理者と県が運営しています。地元の民間企業の指定管理者と都道府県と1対1の出資をして、実行委員会を作って、執行のための口座を作る。そこに、両者がある一定の額を入金をするという出資形式でやっています。たくさんの方が来て展覧会が黒字になれば、出資額が出資した側にて返金されますが、赤字になれば、出資したものが返ってきません。赤字のリスク管理が必要になってきます。また、出資金以上の赤字になる事態についてはあまり怖くて話せないのですけれども。県立美術館には、年間予算があるのですが、修復費や研究費の他の支出を削って赤字に補填しなければいけない特別展もあります。地域活性化ができたり、地域に根ざした情報を発掘して、分かり易く独自に企画したものでも予算内に入らないこともあります。来場者が入る、入らないということよりも、地域を活性化する仕事を大切にしたいと思っています。

北田：広島県立美術館で開催する企画になぞらえたプログラムを、街の公共の場所を使ってやっていました。そこに市民の方が入ってくる。やっていることは美術館のプログラムの

ようなものであって、街中や野外でやっているということですね。美術館の活動は、美術館の外でもあり得るという発想がありました。美術は美術館の中にあるだけでいいのか、あるいは美術館の中には美術しかないのかという問題もあります。そういうことは広島市立大学の先生方は幅広くやっていますので、美術館をつくっても、人が来ないのではないかと心配はしていません。むしろ、待つのではなく、私たちの取り組みの中で、答えが出てくるものと思います。前川先生がされているような、竹プロジェクトは地域に展開しています。美術館の中の活動ではないけれども、美術活動を続けられています。感じられている部分や今後の課題があればお願いします。

前川：我々がやっているのは、美術館があって、そこに人を入れ込もうというのではなく、自分たちが外に出て行ってそこで何かをやって、それを見に来てもらおうということですね。先ほど自分がやりたいことと、ニーズがあるかどうかという話だと、自分がやりたいからやっているということで、ニーズがあるかどうかというのは良く分からないままやっているのが現状ですけれども。自分の専門分野は石を素材としているので、重量物のため作品は建物や美術館の中には入らないことが多くて、自分で発表場所を作るしか方法が無いという経験が、事の始まりです。7 年ほど前になりますが、ドイツのニュルンベルグ美術大学の彫刻科の人達から、日本で何か活動したい、何か一緒にできることはないかというメールが突然入ってきました。その後カタログの交換やメールのやり取りが続いた後、何か一緒にやりましょうということになり、ニュルンベルグの学生さん達と先生2 人の計 10 人が広島にやって来ました。勿論お金も何も無いものですから、広島市立大学の施設を使わせていただいて、そこで作品を制作しました。地域の方々に協力を願って、作品を地域の里山とか、民家とかを借りて展示し、コストを抑えました。観客となるお客さんにとっては、非常に日本的な風景の中で国際的な作品が見られ、ニュルンベルグ美術大学の方々にとっては、実際に地域の方と触れ合うことによって日本の文化を短期間で体験できるではないかという試みでした。私達の大学の近くには竹藪の山があって、うっそうとしたままであっても、ああいうものだということに済ませていましたが、外国に長く住んでおられ、このプロジェクトの参加者でもあるハノーバー専科大学の藤原教授によると、外国の人達はとっては竹というものが非常に日本的なものだという見方があるそうです。参加の学生達の材料が欲しいということで、地域の方に竹の話を持ちかけましたら、竹はいくらでもあるから取っていいよということで竹を切り始めました。これまで、美術の素材として竹を使うことは無かったのですが、竹を切ったら竹藪が非常にきれいになって、ついでにそこを発表場所にして竹林の中に竹の作品を作ったんですね。地域の方の中に社会福祉協議会の会長さんがいらっしゃって、この地域の中に芸術学部を持つ大学があるのだから、美術の力で地域の中の人と物を繋いで、活力になる方法はない

かと以前から考えていたようで、地域と大学が一緒何かにやりたいとの発想を既に持っておられました。地域全体が一つの美術館というふうにしたいということもおっしゃっていました。外国の人が来るので受け入れてもらえませんかと話を持ちかけたら、その考えと話が合って、地域は全面的に協力しますということでした。また地域にはすごく立派な神楽などの伝統芸能が残っていて、それを中心に祭りをされていますが、それに招いてくださったりもしました。大学が設立されて 10 年以上経ってから、初めて地域にそういう立派な伝統芸能が残っているということに気づきました。大学という施設の中だけで研究をしていると、地域の中に出て行くことが意外と少なくなるんですね。大学から出て活動することによって、外にも目が向いていき、地域の方々と一緒に何かできることに気づきました。そういうことで地域の方々と3 年間竹藪を整備しながら、竹プロジェクトで作品を発表してきました。音楽を音響の整った音楽ホールで聞くと、細部まで聞こえて作曲家や演奏家の意図がよく分かります。美術館の中では美術品の素晴らしさというの分かる。しかし野外などでは美術館での展示などで拘束されたものが解き放たれて、創る事や見え方に変化があるのではないかと思います。大学の中での研究と地域への還元という二つのものがうまく作用していくと、その中で生まれてくる作品に対して非常にいい相乗効果があるのではないかなと思います。美術館でも、地域全体が一つの美術館なんだという幅広い視野で、学芸員が美術館の中の整備をしながら、外も美術館の影響下にあるという考を持つと、もっと大きな効果を生むことができるのではないかと思います。本学の芸術資料館の学芸員を増やしていくという話の中では、是非、外も含めての考え方を持ってもらって、広島市立大学を核にした美術のいろんな広がりが生かされればいいのではないかと思います。

松田：昨年、埼玉県川越市にある川越市立美術館に、日本博物館協会という全国組織の研修会に行きました。関東にある美術館の学芸員の方が集まりました。美術館や博物館の学芸員は、皆、専門が違ったりして、なかなか連携がとれません。意見交換をした時に、博物館、美術館の人たちだけで何かやろうとしても限界があるとのこと。埼玉県の文化庁芸術拠点形成事業も、地元のアーティストの方、地域の方、大学の方が運営委員会に参加されて運営されていました。自分が参加している NPO 法人の立ち上げも、広島を活性化するネットワークのために作ったものです。芸術資料館や広島市立大学も、芸術資料館のスタッフだけでやろうとすると、マンパワーが大変だとおもいます。地域のニーズに応えながら、地域と連携して、大学を一つのステージとしてワークショップなどに使っていくという方法があるのかなと思いました。

北田：前川先生の取り組みのように、直接地域に入っていくやり方もあります。美術館の箱物を造るだけではなくて、独

立自立した研究機関みたいなものが大学のなかにあるというのは研究や地域連携の刺激になるのではないかと思います。それは、中にも外にも展開する必要があります。「展覧会をつくる」自体が、市民とどう連携するかという試みでした。NPO 法人の立ち上げも重要な要素になってくると思います。アートプラットフォームのような形でまちづくりに美術館も加わる、大学も加わるという形です。このような試みは各地で進んでいるのではないかと思います。我々はどうするかというところに来ています。

伊東：私は、彫刻家で、素材を使って造形物を造るのが専門分野です。僕らが大学を受験した時代に比べると、美術に対する興味や意義が疑われてきている。こういう時代で受験生が減っています。最近思ったのは、我々の美術は美術館のための美術で、美術愛好家とか美術関係者のためだけの美術になっているのではないかとことです。中学生には中学生の感性があるものですが、中学校でも指導要領が変わって、授業数が減っています。芸術というものは感性を基にして社会的な意義があった。最近、大学の学長は理系の方が多く、本学でもそうです。科学が重視される。そういう方達にとっての美術の捉え方はどのようなものなのかなと思います。僕は素材を中心に造っているもので、そこにある石とか木とかというモノに対してどういう取り組みをしているのかということが常にあります。この木でこういうものを造りたいという目的が、やってみると目的通りいかないわけです。その現実を知るといって、我々が住んでいる世界の現実を知ることの意味が、造形制作にはあると思います。そういうことを、美術をやらない人達にどのように伝える方法があるかということを考えます。一つの体験や、一つのプロジェクトや、取り組みを作り出してその取り組みのなかで、そういう人達へ美術を伝える方向をとっていかないと、美術家だけでやっていたのではどうしようもない。そういうことを考えていきたいと思っております。

それは美術館に人が入る、入らないということに直接繋がるかもしれないし、美術のための美術ではないということが、展覧会の企画に反映されれば、違う領域の人が展覧会を見に行くということかもしれない。展示そのものは美術かもしれないけれども、そこで、美術関係者以外への繋ぎとして、美術館が見せる考え方が変わる、ということを考えるべきじゃないかと思います。我々は大学で、国際や情報の学生向けの造形の授業を持っているのですが、美術をやらない人が美術を勉強して、どうするのだろうか前は思っていたのです。たまたま、担当することになりまして、面白かったことは、美術をやっていない人に、我々がやっている美術の意味を伝えるような方法とか表現があるのではないかと思ったことです。先ほど竹プロジェクトの話の前川先生がされたのですが、週一回の授業だと、山の環境の中に入って体を使いながらできる授業はできないかと思いました。そういうことを体験するような授業をするなり、自分が美術館で展覧会するのだったら、美術館関係者以外へ伝えられるものを造形に取り入れて

考えていければと思います。

北田：視点はいろいろと違いますが、地域に対する働きかけには、教育の介在がすごく重要だと考えています。我々は専門でもありますし、そこを皆さんも考えられているのだなと思いました。また、単純に作品のパワーというものも重要視したいと思います。

齋藤：「展覧会をつくる」の最初は「サムライズダンディズム」というもので、今回のウインター・フェストで5回目です。1回だけ少年マガジンの編集者、大伴昌司の資料で、本学の芸術資料館の収蔵品ではないもので展示をしました。それ以外は本学の芸術資料館にあるものを使って実施してきました。今回のウインター・フェストに対しては、特に光をテーマにしたもので展示を構成するというので、具体的にいろいろなものが出てきました。いかにそういったいろいろなモチーフを、空間造形的にリンクしていくかということをしてきました。日程がタイトで強引に実行しなければならなかったのが、とても大変でした。本学芸術資料館にある収蔵品で何かをするのではなく、市民の方々から出された展示物ですることができれば、もう少しエネルギーに市民の方が参加できると思いますし、あわてて片付けるのではなく、丁寧にできる時間が持てたら、2年ぐらいのスパンでやってもいいのではないかと思います。

北田：美術館は、展示や教育という機能をもっています。本学の教育の問題と、新しい研究センター的なものも含めた構想を実現する道を見出せるのかどうか。また、そういうイメージを皆さんで持てるのかどうか。いかがでしょうか。

加治屋：一つは、研究センターの構想というものがありませんが、それは芸術資料館を有効活用しようということだと思います。研究センターを作る目的というのは、別に明確にあったほうがいいと思います。薩摩先生がおっしゃったのは、美術館をつくと二つの展開があるということでしたが、地域連携と国際交流というのは、本学の情報科、国際、芸術という3つの学部にとって大学の顔というのできて、交流の場になってくると思います。現時点では芸術資料館は、貸し会場的な機能となっており、各教員が企画をつくって、展示する場となっていて資料館独自の主体的な判断というのではありません。個々の展覧会は、それぞれ面白いものをやっていますが、それぞれ別の実行委員や研究室が企画した展覧会で、資料館としての顔が見えないですね。現在の委員会形式で、ある程度の活動は可能ですが、専任教員がキュレーションができて、一つの判断ができるというのが望まれると思います。本当に研究センターをつくるということであれば、専任教員を置かないと難しいのではないのかというのが私の考えです。二つ目は、研究に関しては、芸術学部の中で唯一の理論系教員です。芸術学部では現在、創作系の学生のみを募集しているわけですが、私は、大学院の論文指導と、現代表現領域

を担当しています。東京藝術大学の場合、美術学部芸術学科があって、それとは別に美術館に専任の教員がいて、研究がされています。広島市立大は学部の中に理論系教員の部署がないにもかかわらず、活動するのは難しいと思います。理論系教員の部署での研究活動があって、学部の教育に関わっていくことが望まれます。その上で美術館の研究活動があるのではないかと思います。

大井：賛成です。もういちど考えてください。大学と美術館というものを考えたときに、大学教員のやることとして、研究・教育・学校行政的な学校運営、最近盛んに言われているのが地域貢献です。美術館学芸員の仕事は何か。それは、収集保存・作品調査・公開展示です。これは伝統的にやってきています。大学美術館というのは、異論があるかもしれませんが、社会教育をする場所です。大学の美術館は社会教育施設なんです。社会教育は古い言葉で、今は生涯学習といえます。学生に限らず、一生涯勉強する場所として、社会に開かれています。どの大学でも博物館学芸員養成講座はありますが、それは学生に対して社会教育をやっています。一般的な講義と違っています。どういう点で違っているかということ、学生は最初に大学に通った時点で同一能力で同一年齢です。地域のものである美術館には、学生はいません。そして、大学には、モノが無かった、資料が無いのが普通の大学でした。しかし、大学のユニバーシティ・ミュージアム構想では大学でもモノを持つように文部科学省は進めてきました。全部の大学にそうするかと思いましたがしませんでした。

韓国では、法律で全ての大学に博物館を持つことが義務づけられました。韓国の大学美術館は古墳や考古学資料を収集しました。日本でも、地方の国立大学は地域に根ざした考古学資料を集めました。国によってもミュージアムの歴史は違いますし、現状は違うと思います。税制や教育システムは、政治の影響を大きく受けています。いつ何時風向きが変わってくるかわかりません。大学の執行の人たちの方策によっても変わる。本学、芸術資料館というものを大きく改良するためには、当然ですが、専属スタッフを充実させなければならない。ローテーションで館長をやってもだめです。個性をもったミュージアムとして、当面、館長は学長が兼任すべきといたい。大学美術館の管理の問題で、増員で大幅に専任の人を増やすということを今から考えてもらいたいと思います。いまだに地域貢献ということを盛んに言っているけれど、そんなに皆さん学校が好きでしょうか。たいていは皆、学校は嫌いなんです。今、開かれていますから大学に来てくださいと言っても、敷居が高いです。明治25年に日本の学制令が發布されて、優れた学校教育制度が始まったといえるはずですが、学校は教化する場所です。それとは、違う学校像を作りたいものです。しかし美術館は、すべての人が対象の集客施設でもあるわけです。そういう点では大学美術館は社会教育の重要な施設に

なりえるとおもいます。私は人生の、美術館、図書館、映画館の三冠王になりたい。私営や公立という種類の違う館がありますが学生時代を過ぎても、生涯学習への存在意義は大きい。社会教育法、生涯学習、そういう観点に立ったときに図書館のほうが歴史が古い。図書館は同じ税金で運営されていますが、本を貸し出すのは無料です。美術館も入館料を無料にするべきです。これは実現できると思います。図書館が有料な国も外国に沢山あります。入館料を無料にする。来てくれる人が喜んでくれる方策を立てて、利用者を大切にする。なんのためにやっているのだということが重要だと思います。大学における学生は評価されます。美術館に来る学生は自分を評価するのは自分なんです。そういう点では、美術館は大学以上に多目的で多彩なものです。さまざまな方策があるわけで、可能性が沢山あると思います。広島市立大学は3つの学部しかないですが、理科系の展示品を大いに芸術資料館のなかで展示してほしいと望みます。そのことが3学部に貢献になる。

北田：皆さん非常にいいことを言うてくださるので、継続して取り組んでいただきたいと思います。専任学芸員の件も前から言ってきています。大きな問題ですので、本学の将来構想に向けても、そこは、押さえていきたいと思っています。もう一つのテーマとして、この大学の多くの教員が取り組んでおられる再現や再興、復元という研究と、情報科や国際、理論系の教員との学際的な取り組みが可能なのではないかと思います。各専門研究のクロスする部分を次の展開に進める必要があるところだと思います。そのために必要な連携や研究施設についていかがでしょうか。

中嶋：平和公園のところに戦前あった中島町という街を、生き残った人の記憶の証言や残っていた写真から、復元しようという事業に関わっています。その関係もあって、CGについて、非常勤助教の教員や、国際の教員、情報の教員と協力して、外からは、企業とかテレビ局や平和資料館と連携して運営しています。大学はこんなに組織として力があつたのかと実感しました。今の大学の構造で、連携も無く、それぞれの分野の人達がそれぞれの研究を続けていても、それだけでは新しいものが生まれにくいし、地域に貢献するというのはありえないのではないかと思います。広島はおもしろいと言われるためには、ネットワークが絶対必要だと思います。ネットワークの具体的な例として、インターネットがあってここから世界に発信できて、海外からもアクセスできる。それは、芸術学部だけではできないですが、国際学部の教員、情報科学部の教員に協力し、総合的な、我々が持っているシーズを発信していけば、活力が生まれます。それにつながっていくには、場所として、美術館はもちろん重要だと思いますが、開かれた大学にして、場所も有効活用し、そういうことも含めて新たな場所として、研究施設を展開していけばいいと思います。全国には、博物館や学芸員が交流する学会や協会などのネットワークがありますが、広島にはあるのでしょうか。香川大

学には二つの展示施設があり、一つは市民に公開するもので、一つは学生が簡単に展示するようなものです。その二つのほかに、市内に3つの美術館があるのですが、ネットワークがしっかりしていて、巡回展が来たときには、それぞれの美術館の学芸員が集まって、企画の実施館を相談して実施されているそうです。広島市内に3つの美術館がありますが、学芸員が集まって、連携協議して興味を持てるような展覧会を開いていけば、お客さんは来ると思います。その連携を大学が主導できるのではないかと思います。そういうことも設計できるような学芸員か、人材が大学に必要なのではないのでしょうか。

薩摩：大学の研究者というのは自分の専門がなくてはいけません。自分が興味を持ったこと、疑問に思ったことを解決するのが研究の基本です。ニーズやシーズを気にすることはありません。それが、一昔前の先生はそれでよかったかもしれませんが、今これだけの情報が飛び交う時代になっていまして、大学が社会的な対応を迫られているので、自分の研究を踏まえた上での協同、連携、ネットワークというようなものが重要になってきますし、先ほども申しましたように、そこから大きな成果が上がってきます。例で申しますと東京藝術大学美術館に輻管という一番古いレコーディングシステムが多数保存されています。しかし、カビが生えているような状況でした。日本には北海道大学ほか、いくつかに保管されていたのですが、アイヌの声を取材した輻管があったり、大変貴重なものです。なんで美術史学が専門の私が輻管をやっているのかわからないともいえますが、どうにかしないといけないので、調査を始めて、音楽学部の教員にも協力を頼みました。その調査に世界中の博物館を廻ってまいりました。ストックホルムの博物館やパリの国立図書館へも行きました。東京藝術大学から正式に行くと、丸一日調査させてもらえることもありました。すると、成果があがるし、面白いんですね。パリの国立図書館では、その国で出版された本を国立図書館に2冊づつ納めなければならないという制度は、レオナルド・ダ・ヴィンチのバトロンだったフランソワ1世が、16世紀初頭に言い出したこと、などということも知りました。チームを組む、ネットワークを築くということは、外から見ても仕事をやっているのが公開されて見えますし、協同関係というものは本当に大切なものです。それらは、ただ、やりなさいという時にできるものではなくて、そういうネットワークができるような場所になる美術館を立ち上げるべきだろうと思います。美術館の機能を持ったセンターがいいと思いますが、そういう場ができると、学内の教員が、必要に応じてタスクフォースが組めます。そういうものができれば、広島県内の美術館のネットワークに入れますし、全国の大学美術館のネットワークにも入っていけます。世界的なレベルのネットワークにも入っていける。いろいろな連携ができると思います。

北田：美術館の機能を持った、センター的な構想というのは、殆どの方は今日初めてお聞きになったと思います。柔軟に考えていただきたいというか、美術館というのは開かれている

し、人が交差する場所であり、研究が交差する場になりうると思います。美術館という言葉で限定されたイメージになるとは思いますが、大事なのは交流する中核を立ち上げたらどうかという発想です。保存修復なども研究の力が伴ってくれば、できると思います。そこには学際的な課題が沢山ありますので、そこを発展させることができると思います。

吉田 幸弘（会場参加者、広島市立大学芸術学部デザイン工芸学科准教授）：広島がそれぞれの地域で失ってしまったものを、復元するという取り組みに組み込んでいきましたが、最初は、なんでやっているのかという疑問をいつも持ちながらやっていました。車のデザインが専門だったので、復元の話が来たときに、とりあえず受けました。その後、そのことについて、いろいろ調べ、細かい所が一番大変でした。自分が、ものづくりを通じて協力し、地域の人が手伝ってくれて、その結果が地域貢献になったと思います。市民センターや美術館という名称が出ていますけれども、広島は一瞬にして全て物が失われてしまったのですが、だからこそ、保存修復や復元だとかのキーワードがあります。そういうことは、この地域でないとできないことだと思います。ひろしま美術館、広島県立美術館、広島市現代美術館という、3つの美術館がありますが、広島という特質を持っていることを生かして、広島市立大学独自の美術館ができればいいと思います。

薩摩：ウインター・フェストは、是非、毎年か、2、3年ごとか続けられるといいとおもいます。というのは、例えばアツサウのパウハウスでは毎年フェストがあるんですね。黄色、赤、青とその年の色を決めるフェストで、フェストの期間中、みんなその色の服を着ます。パウハウスの施設は大きいのですが、夜、その校舎が黄色に輝いて、青のフェストの時には真っ青になります。始まってもう5年ですが、パウハウスの名物になっていまして1週間で、市民が3万人4万人ほど集まります。

日本人は光に対する感性が鈍いのでしょうか。部屋の光を決めるのに、蛍光灯電球をあまり考えないですね。あるいは、テレビも音量や画面の色を調整しますが、調光機能を使う人は意外といないです。意外と光にたいして鈍い。この光ということをやテーマとすると、いろんな大きなことができるし、他学部も巻き込んだプロジェクトになっていくような期待がいたします。ある時期、この山や地域が色の光でいっぱいになるとというのは、市民が集まる催しになるのではないかと思います。

照明は美術館でもとても重要な部分です。展示に使うライトがあって、その寿命が仮に1000時間だとすると、調光機で80%ぐらいに光を落とすと2000時間ぐらい寿命が延びます。60%にすると3000時間です。理論的には0%にすると永遠に伸びます。ですから、美術館で仕事をしている人は、絶対に100%にして使いません。経費が浮きますから、必ず20%ぐらい落とします。そういう初歩的なことも、展示方法が分かってくるといい催しになると思います。

北田：皆様のご意見は議論のスタートにしたいとおもいます。長時間にわたり、ありがとうございました。

市民講座「展覧会をつくる」について
概要
展覧会内容 会期 開催日数 入場者数
関連事業
受講生分布
アンケート

市民講座「展覧会をつくる」について 広島市立大学は地域に貢献する国際的な大学を目指している。地域貢献として様々な取り組みがなされているなかで、この市民講座「展覧会をつくる」では市民を対象として、美術・文化系の生涯学習の機会を提供している。この講座は、「再び学びたい」「深く学びたい」という需要の受け皿となっており、年々リピーターも数えている。

期間中8回～12回の講座では、市内美術館の学芸員や、市立大の教員、展覧会企画に相応しい専門家が講師を務める。また、市内美術館での美術館実習も組み込む。受講生はその講義で学びながら、自ら展覧会のコンセプトや展示計画を練り、展覧会を立ち上げる課程に参加するという体験・実践型の講座となっている。

また、リピーター受講生には、より市立大との連携が深まるよう、芸術資料館の市民スタッフとしての活動も今後は視野に入れていきたい。

概要 美術館教育および地域連携プログラムとしての市民講座である。
・本講座では芸術・文化・教育に興味があり、この分野における地域市民活動の可能性について関心を寄せる方の受講を期待する。
・講座を通じて、受講生（市民）自らが展覧会を企画立案し、運営に必要な知識、実務を学び、展覧会を実際に開催する。
・「創作の現場」である本学の環境を生かして多様な表現、技法材料、歴史に加え、制作現場、創意思図などについて美術作品をより深く理解し、展覧会来場者を対象に美術館教育プログラム（講演会、ワークショップ等）を実施する。
・講座は講義と実務を組み合わせて実施する。

展覧会内容 会期 開催日数 入場者数

平成16(2004)年 市民講座「展覧会をつくる2004」
9月20日(月祝)～9月26日(日) 7日間 767人
SAMURAI'S DANDYISM
～手の中の日本の美～武士のオシャレ金工展
市立大芸術資料館に所蔵されている刀の鐔(つば)、縁頭(ふちがしら)目貫(めぬき)、小柄(こづか)、拵(こぎい)など87点を展示。それらの小道具は、刀剣を収める拵に施される刀装具で、所持者の身分や権威を明らかにする役割をもっていた。江戸時代の職人が制作した刀装、並びに明治9年の廃刀令で転戦を余技無くされた装剣金工たちが制作した作品を展示した。

平成17(2005)年 市民講座「展覧会をつくる2005」
10月17日(月)～10月23日(日) 7日間 576人

BLACK×WHITE 白と黒の展覧会

子供の眼差し 作家の眼差し

白と黒の2色だけで構成された展示作品と展示空間。市立大芸術資料館の収蔵作品から白と黒の色に限定して精選した、大皿、彫刻、日本画下図、古書など作品29点と白と黒の画用紙に白と黒の筆記具で描かれた、本川小学校の児童の作品330点、伴南小学校の児童の作品233点を会場の壁面一杯に展示。児童のエネルギーと美術品のエネルギーが一体となり、独特の雰囲気の間場となった。広島市内2校の小学校の積極的な協力を得られたことで、実施が実現した。

平成18(2006)年 市民講座「展覧会をつくる2006」
10月16日(月)～10月22日(日) 7日間 353人
銅版画 夢・人・愛 瑛九展

芸術資料館収蔵作品の瑛九による銅版画252点の中から、54点を展示。前衛美術家として活躍した瑛九(1911～60)が40代の時期に制作した銅版画作品を「愛」「自然」「動物」の3テーマに分類。展示は壁面を使わず、作品を天井から6角柱状に吊るし会場全体が独自の空間となった。ハードグラウンドエッチング、ドライポイント、ルーレット、アクアチントなどの技法を駆使したシュールリアリズムの世界を紹介した。

平成19(2007)年 市民講座「展覧会をつくる2007」
11月4日(日)～11月11日(日) 8日間 375人
図解・大伴昌司の脳世界 大伴万博 EXPO'07
～怪奇と調和～

高度成長期、週刊誌「少年マガジン」の怪獣や未来社会の特集グラビアを編集した大伴昌司。京都大学とNHK エンタープライズに寄託されている大伴昌司の遺品など600点の資料の中から、大伴の自筆図やグラビアの複製、関係図書など貴重な資料38点を展示。会場も高度成長期の時代をイメージした空間デザインとし、年表や交友関係をパネルで解説。大伴のビジュアルジャーナリストとしての側面に光を当てた。

平成20(2008)年 市民講座「展覧会をつくる2008」
11月24日(月祝)～11月29日(土) 6日間 309人
ウインター・フェスト
ひかり あかり いのり ふわりメッセージ2008

150億年前誕生したといわれる光。その光をテーマに市民講座の受講生と学生が企画した展覧会。市民の提供した蚊帳を演出に使用。本館収蔵のデザイナーズの照明器具、学生制作の《Snowflakes》やワークショップが渾然一体となり、印象的な展示空間となった。野外ではキャンドルライティングや天灯の飛行イベントを実施した。

謝辞

研究会での発表を通して本研究に多くの示唆を与えてくれた東京藝術大学大学美術館産學雅登氏、平素から本学の研究教育ならびに芸術資料館の活性化にご支援いただいた広島県立美術館松田弘氏には特に謝意を表したい。

本研究は多くの教員、職員、学生と市民講座に参加した市民によって支えられ、地域の皆様にもさまざまなご示唆、ご助力をいただいた。心から感謝申し上げます。

また、報告書作成にあたっては、本学芸術資料館嘱託学芸員菊田氏に手間のかかる作業に応じていただいた。この場を借りてお礼申し上げたい。

平成 20 年度広島市立大学特定研究
「展覧会をつくる」
- 芸術資料館運営による施設のあり方研究と市民との協働実験 -

研究組織

吉井 章	芸術資料館長 芸術学部教授（研究代表者）
大井 健次	芸術学部教授
大井 健二	国際学部教授
北田 克己	芸術学部教授
蝦澤 達夫	芸術学部准教授
伊東 敏光	芸術学部准教授
加治屋 健司	芸術学部准教授
中村 圭	芸術学部非常勤助教
菊田 恵	広島市非常勤職員 芸術資料館嘱託学芸員
竹澤 雄三	芸術学部非常勤講師 前広島市現代美術館副館長
松田 弘	広島県立美術館総括学芸員

*（職名は平成 20 年 2 月時点）

平成 20 年度広島市立大学特定研究
「展覧会をつくる」
- 芸術資料館運営による施設のあり方研究と市民との協働実験 -
研究報告書

平成 22 年 3 月	印刷
平成 22 年 3 月	発行
発行者	吉井章
発行所	広島市立大学 731-3194 広島市安佐南区犬塚東 3-4-1 電話 082-830-1500
印刷所	株式会社インパルスコーポレーション
写真・デザイン	鹿田義彦